

大切なものは
目に見えない

松下昌義

目次

| | | | |
|------------------|----|-----------------|----|
| 一、 思い違いをしてはならない | 一 | 一、 恵む命に包まれている | 四六 |
| 一、 時の主人は私ではない | 五 | 一、 「聖なる言葉」をいただく | 五十 |
| 一、 目の付けどころ | 九 | 一、 備えは出来ているか | 五四 |
| 一、 死んでも生きても神の内 | 一三 | 一、 人生が変わる(Ⅱ) | 五八 |
| 一、 運命 | 一七 | 一、 大切なものは目に見えない | 六二 |
| 一、 先ず神の支配がある | 二一 | 一、 あとがき | 六七 |
| 一、 あるがままの姿で手を合わす | 二五 | | |
| 一、 よく生きるための秘訣 | 二八 | | |
| 一、 心で信じて口で言い表す | 三一 | | |
| 一、 人生が変わる(Ⅰ) | 三四 | | |
| 一、 わたしの体は神の宮 | 三八 | | |
| 一、 神の愛だけが「私」を救う | 四二 | | |

みちしるべ

心に疑わないで信じるなら、そのとおりに成る。

—マルコ福音書 11・23—

思い違いをしてはならない

思い違いということがある。それは、ものごとを誤って別のことと思ひ込んでしまうことである。

このような思い違いは、さまざまの不都合を生むが、とりわけ困ることは、関わっているものごとの本質から逸れて間違つた方向に行ってしまうことである。それはあたかも、最初のボタンをかけ違つて始めるとき、ボタンは最後までかけ違いのままに進んでいくようなものである。

× ×
イエスさまが示されたことについても、私たちはときとして思い違いをして受け取ってしまうことがある。

人は、それぞれの自分の立場からそれを理解し、自分の思うとおりにイエスさまの言動を理解してしまう。そして自分の立場の援用としてイエスさまの言葉や行いを引っ張り出しかねない。

事実、このような事は、昔も今も何処にでも起こり、また起こりつつある。「イエスもこのように申されました。」と言ひ、「聖書にもこのように記されてあります。」と言ひ。

× ×
古来、偉大な人の言動は、少なくとも正義と呼ばれる事柄に属することについては、どれにでも当てはまるような許容の中のようなものがある。決して一義的な狭量なものではな

い。その意味で、真理とはどのようなことから自由でありどのようなことに對しても自由であると言える。

だから、真理なるものを決して一義的な主義や主張の枠に閉じ込めてはならないし、閉じ込められたそれは、最早真理ではないと言える。

このような観点から、あえて誤解を恐れずに言うならば、イエス・キリストさまの言動によって示し与えられた真理は所謂『キリスト教』という一宗教の枠によって閉じ込められるようなものではないのだ、と言える。それは、『キリスト教』という宗教の枠を超えているのがキリスト教なのだと言える。だから、さらに調子に乗って言わせていただくならば、キリスト教は、『キリスト教』を何時も否定し克服していくキリスト（真理）の命の滾りに生かされている営みであり、そこにこそキリスト教の真理そのものがあるのではないだろうか。

お話が少し横にそれてしまった感があるので初めに戻るところにしよう。

先に、イエスさまの言動について、思い違いをしてはならない、ということであったが、そのもっとも重要なことからは、イエスさまの言動が示すことは、ただ人と人との関わりについての在り方のことではない、ということである。

では、イエスさまがその言動によって示されたことがらとは何なのかというと、それは、神と人との関わりの事実という一点のみであると言える。

こここのところを確りとおさえておかないと、イエスさまについて思い違いをしてしまう。こここのところの初めのボタン

を誤りなく確実にはめておかないと、最後までイエスさま理解はかけ違
いのままで終わることになる。

×

×

このことについて具体的に見てみよう。そのために新約聖書ルカによ
る福音書十五章十一節以下に語られてあるイエスさまの御言葉に注目し
てみよう。

イエスは言われた。「ある人にふたりのむすこがあった。ところが、
弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただくぶ
んをください』。そこで父はその身代をふたりにわけてやった。それか
ら幾日もたないうちに、弟は自分のものを全部とりまとめて遠いところ
へ行った。そこで放蕩に身をもちくずして財産を使い果たした。なにも
かも浪費してしまつたのち、その地方にひどい飢饉があつたので、彼
は食ふことにも窮しはじめた。そこで、その地方のある住民のところ
に行つて身をよせたところが、その人は彼を畑にやつて豚を飼わせた。

彼は、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであつたが、何
もくれる人はいなかつた。そこで彼は本心に立ちかえて言った、『父
のところには食物のあり余っている雇人が大勢いるのに、わたしは此処
で飢えて死のうとしている。立つて、父のところへ帰つて、こう言おう、
父よ、わたしは天にたいしても、あなたにむかつて、罪を犯してしま
いました。もう、あなたにむすこと呼ばれる資格はありません、どうぞ、
雇人のひとり同様にしてください。そこで立つて、父のところへ出かけ
た。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみるとめ、哀れに思つて走り寄り、
その首を抱いて接吻した。息子は父に言った、『父よ、わたしは天にた
いしても、あなたにむかつて、罪を犯しました。もうあなたの息子と
呼ばれる資格はありません』。しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、

早く、最上の着物をだしてきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきも
のを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。
食べて楽しむうではないか。この息子が死んでいたのでに生き返り、いな
くなつていたのに見つつかつたのだから』。それから祝宴がはじまつた。

このような話しは、昔も今も人が生活をしてゐる処で起る、言わば
日常的な出来事である。このような誰でもが体験するであろう生活の出
来事を語りつつ、イエスさまは、その実、神と人との関係を語り示して
おられるのである。

私たちは、この話をただ父とその息子との話し、親と子との話し、つ
まり人と人との関係の話しとして聞いてしまつてはならない。ただそれ
だけのこととしてこのイエスさまの話しを聞くならば、イエスさまに
いて思い違ひをしたことになる。

×

×

イエスさまは、世間の人情ばなしをして、そこでちよつぱり人生の教
訓を私たちにしようとしておられるのではない。――しかし、イエスさ
まの教えをその程度に受け取つて、ありがたがつてゐる人が多くいらつ
しゃるのも事実である。だが、イエスさまをそのように矮小化してしま
つてはならない――イエスさまは人と人との関わりについて示されたの
ではなく、神と人との関わりの根本で何が起つてゐるのかということ
を示されたのである。先の「放蕩息子の話」においてもこのことは同じ
である。

×

×

そこに登場してくる「父」は神のことである。また、「息子」は私た
ちのことであるが、厳密には「私」のことである。つまり、放蕩息子の
話しは、実は「神と私」との話しなのである。

しかし、このように言うと、「父と息子」との関わりを用いてイエスは、私たちに「神と私」との関係を語られ示されたように思ってしまうのだが、本当のところはそうではなく、その逆なのである。父と息子との関係とその出来事は、神と人との出来事の写しのようなものである。写真のネガとポジとの関係で言えば、父と息子との関わりとその出来事とはポジであって、神と私との関係とその出来事とは、そのポジに対するネガのようなものである。

しかし、私たちはそのように思っていない。この世のさまざま出来事を用いて、神と私たちとの関係を譬え話として語っているのだと思っている。これは大いなる思い違いである。

イエスキリストは、神と人との関わりを、私たちが現実だと思込んで見ている父と息子との関わりよりも、より鮮明に現実のこととして見て知っておられるのである。このところは、何度申し上げてもよいにどこに大切なことなのです。

X

X

息子は父のすべてをまったく知ってはいない。それは、私たちが神をまったく知ってはいないことと同じである。息子があって親があるのではない。親があって息子がいるのである。自分がいて神がいるのではない。神がいて自分があるのである。父がいなければ息子はいい。神がいなければ自分はいない。なにもかも自分のもののように思い込んでいるが、はたして、自分のものなどどこにあるのか。光りも空気も水も食べ物も着るものも、手も足も口も頭脳も花も鳥も魚も、もちろん命も……とにかく、どれひとつとして自分のものなどない、すべては与えられ備えられているものばかりである。また、一体私は何を知っているというのか、なにもわかってはいないのである。明日の我が身さえ分からないのだ。少しばかり、科学とやらで自分の身の周りのことや、

宇宙の仕組みが説明できかけてきたからといって、一体それがどうだと
言うのか。分かった、分かったと大きな口をきくほどのことが、本当に
分かったのかというと、その実、何も分かってはいないのである。結局、
私たちは自分自身を偉大な者であるかのこどくに幻想を抱いているだけ
で、本当は、吹けば飛んで消えてしまうような泡粒にすぎない者なので
ある。にも関わらず、わたしが、わたしがと言い、自分で自分が維持で
きるものであるかのように思い違いをして、もともとないにもか
かわらず、自分のものをくれと、父に当然のような顔をして申し出る息
子の姿は、まさに、私たちが神の前で大きな口をきく傲慢の醜態にはか
ならない。

X

X

父のものを、あたかも自分のものであるかのようにして持って出た息
子は、自分で自分の墓穴を掘ることになった。感謝なく、祈りなく、た
だ五感の欲を満たすことで日を過ごし、そのような自分の生きざまにな
んの不思議も覚えないまま生きている者は、必ず人生の挫折と絶望とに
遭遇する時が来る。その挫折と絶望から自分を救い出してくれる者は誰
もない。ただ悔やみ、嘆き悲しみつつ死を待たただけとなる。

しかし、父は息子に願いをかけつつづけていたとイエスは言われる。そ
れは、神を見失った私たちに、神が願いをかけ続けている事実を示され
たのである。

神とは、私たちに願いをかけつつづけておられる方であり、私たちは何
時いかなるときにも、神に願いをかけられつつづけている者なのである。
そして、この神の願いをかけられていることによって、今生き得る者な
のである。神の願いが無くなる時、私たちは寸時も生きてはいられない。
だのに、私たちは自分の願いで自分は生きていると思込んでいる。

X

X

私たちの内なる思いはとても頑迷である。素直に自分の我を捨て去ることとは出来ない。かの息子は父のもとに帰らなければ、自分は死ぬと分かっている。彼が言う、父のところへ雇って貰おうと。自分の我を立てようとする。おうとする。そうでもしなくては、父の前に自分の顔をだすことは出来ないと思う。一見謙虚なこの息子の態度は、その実、父の願い心を少しもわかってはいないし、したがって、自分がどれほどに父に願われている存在であるかということにも全く気づいてはいない。

絶望してもなお、自分自身であろうとする我の持ち主こそ、ほかならぬ私たちである。愚かで何の力も智慧もなき自分が自分自身なのであるにも関わらず、なおも、自分を立てようとする。初めから立てるべき自分など何もないのに、ない自分を立てて、自分を主張しようとする情けなき者がこの私なのである。

帰って来た息子の姿を最初に見出したのは父であった。駆け寄ったのも父であった。抱きよせたのも父であった。すべてが父によってはじまる。父はいつもいつも息子に与えるばかりである。息子に何も期待しない、要求しない。徹底して与え、徹底して息子に願いをかけ続ける。この関わりこそ、神が人に関わる関わりそのものの姿なのである。この神の願い心を、イエスさまは身をもって行じられた。その姿が十字架による死である。十字架こそ神が人に関わる徹底した愛の具体的な行為なのである。どうあっても人を救いあげようとする神の愛の真実の完遂こそイエスの十字架の死である。いかなるものも、この神の愛と真実の前に立つとき必ず救われる。

かの息子は父の一方的な愛を前にして、自分が父からどれほどの願いをかけられている者なのかということに目覚めた。最早、自分を繕い我

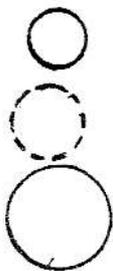
をはって生きる愚かさに目覚めたのである。父の一方的な愛は迷いの中で死んでいた息子に全く新しい命を吹き入れ、大安心の生涯へと生かしたのである。

どのような人も神に愛され願いをかけられ生かされている。これが神と人との根源に於ける原関係である。私たちに取って現実とはこの出来事であって、その写しが私たちが生きて見聞きしている日々の事柄にはかならない。

なぜ人はこの世で生きねばならないのか。それは、神と人との根源的な原関係の現実を知るためである。なぜイエスさまは十字架に死に復活なされたのか、それは私たちが、神と人との根源的な原関係の現実に働く命に目覚め自覚的に与えるためである。

再び言うが、なぜ今、人はこの世を生きているのか。自分の欲を満たすためにだけ、この世を生きるなら、その人は自分を空しく死するためには生きただけとなる。そのような者は、ユダにイエスが言われたように「生まれて来なかったほうが幸いだ」といえる。しかし、人がこの世を生きるそこで、神がどれほどに人を愛しておられ、その魂の成長を望まれ、永遠の光明に光り輝くことを願ひ、そのように導いておられる神と人との原関係の現実に開眼させられるなら、その人こそこの世がもっている素晴らしさを最善に生きたと言える。

友よ、この世に生かされている有り難さを無駄に生きることなく、日々の中に神に願われている現実を、イエスさまの言葉をとおして見させていただけようではないか。



べしるちみ

天の下の出来ごとには、すべて定められた時がある。

— 聖書 —

時の主人は私ではない

何事にも時があり

天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

生まれるに時があり、死ぬるに時があり、

植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、

殺すに時があり、癒すに時があり、

こわすに時があり、建てるに時があり、

泣くに時があり、笑うに時があり、

悲しむに時があり、踊るに時があり、

石を投げるに時があり、石を集めるに時があり、

抱くに時があり、抱くを止めるに時があり、

捜すに時があり、捨てるに時があり、

裂くに時があり、縫うに時があり、

黙るに時があり、語るに時があり、

愛するに時があり、憎むに時があり、

戦うに時があり、和らぐに時がある。

旧約聖書 伝道の書三章一―八

なんと明快率直な言葉だろうか。快さを覚えることばである。

天の下に生ずるすべての出来事には時がある、というのである。

では、その「時」とは何なのであろうか。先の伝道の書に

おける時とは、神の手のなかにある時のことである。

× ×

今日、時が神の手の中にあるなどとは誰も気づいてはいない。時は人の手の中にあると現代人は思い込んでいる。あたかも時を物の如くに対象化して、自分が思うように自由に用いるものだと思いついでいる。時を切り刻み、それを一定の量となし、配分して自分が思うがままに使う。ここでは、時の主人は人であり、事実、時の主人は自分であるとそれぞれに思っている。

しかし、はたして、時の主人は人なのだろうか。また、自分の時は自分で自由に使うことが出来るものなのだろうか。

× ×

それにしても、時とは何なのだろうか。多くの人々は時を量としての時間だと思っていることは先にも述べたが、加えてその時間には内容がなく、人が自由に使えるように自分に對して在るものだと思っている。だから人々は、まさに湯水の如くに、時間を使う。そのような状況では時間に対する感謝など全く無いのが当然となる。

時を内容の無い量であり広がりだと思い、それをを用いるのは人なのだと思いついでいる。その思いはそのまま、その人の人生観となり生き方となる。つまり、人生はすべて自分が好むように埋め、好むように歩むものだと思う。

しかし、時とは本来そのようなものなのだろうか。決してそうではない。

時は、決して無内容なただの量でもなく、また無意味な広がりでもない。時には本来内容が綿密に詰められ、大いなる

意味が秘められてあるのだ。

このような時について語っているのが冒頭に記した聖書の言葉である。それは、言わば、時の秘密を解き明かしているのだと言える。と同時に、それは人間の存在を含めたすべての物事の存在の秘密をも語っている。

X

X

時は内容無くただ無意味に流れているのではない。時は何時もそれ自身内容を一杯秘め、それ自身において語っている。しかし、人はその時自身が語りかけて、示している内容に思いを向けることなく、時の内容を埋めるのは自分であり、従って、時の主人は自分なのであると思ひ込んで、時を自分の欲で貧りつつ生きている。

時の主人は人ではない。神こそ時の主人なのである。誰も時を造り出すことはできない。人はただ与えられた時を受けそれに生きる他に何もできないのである。

その時が来て生まれ、その時が来て人は死ぬ。その時とは、内容がいっぱい詰まった時自身のことである。その時の内容に人は指一本たりともふれることは出来ない。その時は、その者にとって正にその時なのである。そのような時の連続こそ時間そのものである。とすると、そのような時間は、もはや時間を超えている。その時は初めからあったその時であり、かつ終わりまでありつつづけるその時であるからだ。だから、その時とは永遠的な時なのである。

X

X

すこし表現が堅苦しくなってしまうたようなので、別な言い方で語ることにする。

例えば、一粒の花の種について考えてみよう。この場合私たちは、種は正しく種であってそれ以外のなものでもないと思う。しかし、種には内容が一杯詰まっている。その内容とは、種そのものに於いては何も

見えない。だが、確かにそれはある。そこには将来茎となり、葉っぱとなり、美しい花となるその姿がすでに秘められている。つまり、一粒の花の種そのものには将来、即ち、「将来に來らむ」その花そのものが既に現在、その種に秘められてある。しかし、私たちにはそれは見えない。種は種としか見えず、花が美しく咲くということとは未来のことと思っている。その未来も、未だ來らないという意味において、ひょっとすると來ないかも知れない不確実なこと、つまり種に託した願望としての未来だと考えているか、または、どうしても、花をこの種から咲かせるのだとする決意の未來だと考えて居る。このように、私たちは現在と未來とを異なった別々の時だと思っている。これが、私たちの時間についての一般的な考え方であり、とらえ方なのである。だが、そのような時間に對するとらえ方は正しいとは言えないのではないだろうか。すくなくとも、先の聖書の時のとらえ方は、そのようなものではない。

X

X

私たちが時間を考えるとき、一般的に現在を中心にして考えているつまり、現在は絶え間無く未來から來て、絶え間なく過去に去って行くものだと思っている。日で言えば、私たちはいつも今日に生きており、決して前日にも又後日にも生きてはいないと思っている。また、今で言えば、私たちは何時も今に生きていたのであって、決して今の前にも後にも生きてはいないと考えている。そして時は絶え間無く流れ、それに意味を与え内容を付与するのは自分だと思ひ込んでいる。つまり、時間の主人は自分だと思っている。しかし、私たちは本当に時間の主人なのだろうか。先の聖書の時間のとらえ方はそのようなものではない。

X

X

「來るを迎えることにおいて將來は成り立ち、また去るを送ることに於いて過去は成り立つとすれば、その來るはいづこよりであり、又、そ

の去るはいづこへであるか。考察を厳密に体験の範囲に限定する限り等しく「無」または「非存在」と答えねばならぬように思われる。」と、

波多野精一氏はその名著「時と永遠」で言う。(全集四巻一八九ページ)ほんとうにその通りだと思う。時間が無から起こり「非存在」つまりまた無へと消え去って行くのだとすれば、例え時間の主人として生き、それにどれほどの内容を詰め込んだとしても、すべては空しいことだといえる。おまけに、現代人は、その空しい時間に追われ追われて正に時間の奴隷となり、朽ち果てて行くなれば、そのような人生とは一体何なのだろうか。

自分を時間の主人のように思い込み、それでいて、時間に追われ時間の奴隷のような生き方をしている現代人が、何時も虚無の深淵を内深くに秘め、不安と恐れを抱きつつ生きねばならないのは当然のことだといえる。そのような時間のとらえ方による生き方には救いはない。その行く末は虚無と絶望のみである。ここに現代人の最も恐るべき不幸がある。

×

×

時間の主人は人ではない。自分ではない。時間の主人は神である。神に在っては時間には初めも終わりもない。初めも終わりもないとは、永遠であるということ、永遠とは、終わりがなくいつまでも続くことだと理解するならば、それは時間の主人が自分だとおもい込んでいるところからなされる発想である。それは、永遠に自分が生きるということを、自分がいつまでも死なないで生きつづけることだと思ひ込むのと同じ発想である。しかし、永遠に生きるとは、そのようなことではない。自分が生きている時間の観念で永遠を考えることは、やはり、自分を時間の主人としている発想によるのであって、正しく時間というものをとらえたことにはならない。

人はいつともこのような誤りをしてしまう。初があり、途中があり、終わりがあると、そしてそれぞれの時はすべて別々だと思ふ。つまり、時間を量として見る。そして、限り無き量としての時間を永遠だと思ひ込む。しかし、本当の時間は初めが終わりであり、終わりが初めなのであって、そこには流れなどないのである。謂うならば、生も死もないのである。過去も現在も未来もないのである。

×

×

私は今、決して難しいことを語っているのではない。新約聖書の黙示録には三度にわたり、天の玉座に座しておられる方(おそらくキリストさま)の言葉として「われは初めであり、終わりである」と語られてある。(黙示録1.18。21.6。22.1.3。)

将来とは「将来に來らむ」ということであるとは、波多野精一氏の言うところであるが、これをあえて言うならば、確実に來ているということである。否、むしろ來てしまっているといった方が正しいと思ふ。例えば、先の花の種のことというならば、種に於いて将来に花は満開なのである。神が支配するその時においては、すべてそこに神の無限の創造的命が漲り、愛が輝き渡っているのである。何時も「今は恵みの時、救いの時」なのである。だから、神に在る時は、いつもその時が永遠なのである。永遠について先の波多野氏はつぎのように言う。「創造のある処では、一切は常に新たに常に若く常に生き常に動く。極みなき湧き出る將來の泉よりいつも新鮮なる存在を汲み受けつつ、いつも若き現在の尽きぬ喜びに浸る―これが永遠である」(先掲げ書四七四ページ)

×

×

時の主人、時間の主人は我々ではなく神なのである。「なにごとにもときがあり、天の下のすべてのことには定められた時がある。生まれるときもあり、死ぬに時あり、……」それらは、すでに在ったものが時満

ちて現成したことなのである。そして、そのどれもが、神の栄光を現している。神の支配そのものの輝き、愛、恵みそのものを語り現している。止に、神のなさることは時に適って美しいのである。だから、現れたもので神の御手にならないものは一つとしてない。

神は何時にも創造者、保持者、完成者である。人がどれほどその智慧を絞り手を加えようと、神の時は進み完成し成就する。

× × ×

我々の歴史的世界(それを日常的世界と言う)は激しく日々動く。さまざまな変化は個人に於いてだけでなく社会全体に起る。人は生まれ、老いて死ぬだけではない。その間にさまざまな悲喜もごものが生じる。まことに人の一生は激動の連続である。このことは社会においても同じことがいえる。しかし、それらの一切は所詮は神の手の平の出来事にしかならないのである。神の時から見るとき、それらの出来事は本質的に全く関係がないのである。何故ならば、神の時はすでに一切は成就しているからだ。神に於いては、初めは終わりであり終りは初めであるから。この事実を、イエス・キリストさまは「わたしは既に世に勝てり」と宣言しておられる。

夏くさや兵どもの夢の跡

—芭蕉—

主義主張や利権をかけて狂気となって争ったということ、またその結果、勝利に酔い、敗北の悲惨に泣き苦しんだこと、これらは日常的世界に於ける私たちのまぎれもない事実である。しかし、それも、夏くさの生い茂る夢の跡と化するのである。人が時間の主人となる日常的世界の一切は最後に無化し、神の支配する時だけが、何事もなかった如くに、すべて成就する。これまさに、「天に座する者笑いたまわん」である。

× × ×

だれも誇り、高ぶることは出来ない。否、絶対にしてはならない。

では、どのようにこの歴史的現実の世界を生きればよいのか。その答えは使徒パウロに聞くことが出来る。彼は次のように告白する。

それでは、これらの事について、なんと言おうか。もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか。……………だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。神は義としてくださるのである。だれが私たちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、私たちのためにとりなして下さるのである。だれが、キリストの愛から私たちを離れさせるのか。艱難か、苦悩か、迫害か、飢えか、剣か。……………しかし、私たちを愛してくださったかたによって、私たちはこれらすべてのことにおいて勝ち得て余りがある。わたしは確信する。死ぬ生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも高いものも、その他どんな被造物も、私たちの主キリストイエスにおける神の愛から、私たちを引き離すことはできない。

—ローマ人への手紙八章三一—三九—

歴史的世界、日常的世界から逃げるのではない。流動の激しい人生のその根っこに、それとは一切関係なく厳然として常に、歴史的世界にその創造の手をさしのべつづけ完成させる時の中へ、自分の人生を投げ込み、確信をもって神の命に生きるものでありたいと思う。

友よ、恐れることはない。悲しむこともない。自分が計らう時ではなく、神がすでに、自分に成就されている、その恵みの時にゆだねて生きよう。そのとき、わが人生は完成する。

べしるちるみ

道を踏みはずして死を招くな
自分たちの平の業で滅びを引きよせるな
— 聖書 —

目の付けどころ

「さすがに、あの人の目の付けどころは違う」、などという誉め言葉を聞くことがある。

「目の付けどころ」とは、ものごとを見る時、そのものどどこに関心をいただき、そこで何を見ているかということであらう。

これと同じような言葉に、「気のつけどころ」とか「心のおきどころ」などというのがあるが、おおむね、同じことを語っている言葉だとおもう。

× ×
同じことがらを見たり、聞いたり、体験しても、そこでその人が何を感じ、何を見るかということによって、結果はすいぶん違ってくる。

いつも文句ばかり言っている人がいる。おそらく、そのような人のものごとに対する目のつけどころ、気のつけどころ心のおきどころなどが、文句や愚痴を生み出すような部分のみに向けられているからだといえる。

いつも喜び感謝している人がいる。そのような人は、どのようなことがらに対しても、そこにある喜びの部分、感謝すべきところに、自分の目や気や心を向けているのだと思う。

文句や愚痴を生み出す部分のみに、自分の目を向け、気を

付け、心をおいている人の人生は不幸である。それに反してどのようなことがらのうちにも、そこにある喜びと感謝の部分に目や気をつけ、心をおいている人の人生は幸福である。

× ×
どのようなものごとにも、さまざまな側面がある。しかもそれには、誰にでも見える側面と、よく気をつけて見ないと見えない側面があり。さらに、よほど鋭く且つ、深くものとを見る目をもっていないとまったく見え、気付くことができない側面というものがある。

× ×
私たちは、ものごとが秘めているそのようなさまざまな側面について、じつは、ほとんど気が付いていないのではないだろうか。ひょっとすると、ものごとが持つているさまざまな側面の、一面だけを見て、そのものすべてが分かったと思いついでいるのが、私たちのものの見方なのではないだろうか。もし、それならば、私たちがものごとについて見ていると思っている、そのものは、一種のその人の思い込みによるそのものであり、実際のそのものとはおよそかけ離れたその人の幻想なのかもしれないのである。

× ×
すこし、お話が理屈っぽくなってきたようだが、このところはとても大切なことではないかと考えるので、すこしだけ、お付き合いしていただきたいと思う。

「わたしは、〇〇について、よく分かった」などと言う人がいる。しかし、この世の中で、これほど傲慢なことはない。先に、ものごとにはさまざまな側面がある、と言ったが、それは、単にそれが多面体であると言うだけではなく、その

ものごとの深さにもさまざまな層があるということをも含めて言ったのである。

例えば、一人の人についてみるならば、その人は人としてのさまざま側面を持っている。しかし、その側面をすべて知ったとしても、決してその人を理解することは出来ない。なぜならば、その人には、その人を成り立たせている深さの層があるからである。深さの層とは、その人の存在を成り立たせている背後の深さのことである。もうすこし詳しく言うと、その人自身の個体が成立していることを支えている命の層であり、魂の層のことである。言うならば、その人が未だその人として成り立っていない時からその人を成り立たせているその人の魂の層のことである。

このことを別な言い方をすれば、その人のさまざまな側面を平面的な広がりというならば、その人の深さの層とは、立体的な存在者としての魂の層だといえる。このようなことがらについては、近年「精神の科学」として深層心理学の名のもとに一般に興味がもたれるようになったが、先に存在者としての魂の層と言ったのは、言わば、未だ深層心理学においても手とどくことが出来ない魂の背後の層のことである。勿論、そのような層は、当の本人自身自覚していない。

このように人の存在が持っている広がりや深さとに気づくとき、どうして、そのような存在としての人について「わたしは分かった」などということが言えるだろうか。

×

×

この世に現れているものごとのすべては、必ずさまざまな側面と深さの層とを秘めている。このことに気づくとき、一切の存在がそれ自身不思議な事柄なのだと思うようになる。だから、このことを一つの言葉として、例えば山について言うならば次のようになる。「山は山である故

に山ではない」と。また「山は山でない故に山である」と。しかし、わたしたちは、ものごとをそのようにはみようとしない。そういう目のつけどころ、気のつけどころ、心のおきどころを持たない。だから、ものごとをすべて平面的に、しかも或る側面だけを見て、そのものの全体を見て分かったと思ひ込む。例えば、さきの山について言えば「山は山であって、それ以外のなにものでもない」と断言して、すべてはそれで終わりということになる。ここでは、ものごとの多面性も、ましてやそのものが秘めている深層などは全く切り捨てられている。

このことを私たちは自分自身のこととして経験的によく知っている。例えば、誰かが、自分のことを語ったり、批判したりするのを聞く時、「あの人は、わたしのことを、分かったかのように言っているが、全く理解していない」と思うであろう。

×

×

枯れ枝に鳥のとまりたるや秋の暮

古池や蛙飛びこむ水のおと

静けさや岩にしみ入る蟬の声

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

これらの俳句は、日本人の大方がよく知っている芭蕉の句である。わたしは、俳句には無知であるが、右にあげた芭蕉の句を眺めていると、ものごとの広がりばかりでなく、その深層までが見えてくるように思える。おそらく、俳句だとか詩といったものが秘めている独特の世界こそこれであり、それ故にこそ、俳句や詩は多くの人々に愛されるのである。

先にあげた芭蕉の句は、岩波文庫の「芭蕉俳句集」からの引用であるが、そこで「校注」をしいる中村俊定氏は、その最後の解説のところで

芭蕉の俳風について次のように記している。

「……人生を無常と見る心はやがて対象を愛憐の情をもって見る心へと傾き、物皆自得の非情心はあわれと見る心へと昇華し、かなしびをそうる美へと深められていったのである。芭蕉はそれを「風雅の誠」となづけた。そこではもう言葉を工む必要はなかった。芭蕉の俳諧はそのような境地からうまれた詩である。……」

物皆自得のあわれを悟り、存在するものすべてが尊く美しいものでなければならぬ。ものそれ自身の本来の生命にふれて、そのありのままの姿を率直純粹に抒情することこそ不易の俳諧である。現実の矛盾を超越する「高悟」から現実肯定の精神即ち「帰俗」に到達するところに真の俳諧ありと悟ったのである。晩年の「かるみ」はそうした句境から詠まれる表現の風体をさすものである」(前掲書 四九三ページ以下)

すこし表現がかたくなるしいものになってしまったが、とにかく芭蕉の先の句を眺めていると、人生を含めたものとすべての「あわれ」と共に、それを超えて、人生を含めたものと自身が秘めもっている本来の命の輝きの深層が、くつきりと見え、現実に存在するすべてのものもの有り難さを感じるのである。

このような芭蕉のものごとを見る目のつけどころ、気のつけどころ、心の置きどころは、本当にものごとをまるごと悟りつかんでおり、それ故こそ、多くの人々が深い共感を覚えて、彼の俳句に魅せられるのであろう。

あるとき、イエスさまの処へ、一人の女を連れてきて言った。「この女は姦通の現場で捕えたものです。こういう女は石で打ち殺せと、モーセの教えに命じてあります。あなたはどうしますか」それを聞いたイエ

スは「かがみ込み、指で地面に何かを書き始られた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたの中で罪を犯したことはない者が、まず、この女に石を投げつけなさい」そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始めて、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとり、真ん中にいた女が残った。イエスは身を起こして言われた。「婦人よあの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女が「主よ、だれも」と言うと、イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」

これは、新約聖書ヨハネ福音書八章にある話であるが、ここで私たちは、イエスさまの出来事と、それをめぐる人達に対する目のつけどころのつけどころをなさるお方である、ということだ。

イエスさまは、いつもものごとの存在の根源、つまり深層に思いを置き、そこからすべてを救い上げられるのである。表面に現れた一面だけに目をつけて、ものごとを見られない。また、ただ平面的な側面をいろいろと見るだけで、さも客観的で公平に判断しているかのような愚かなこともなさらない。しかし、人はいつも一面だけのものごとを判断してしまい、そして裁く。先の女はどのような裁き方をする人達に捕まってしまったが、その人達とは聖書によれば「律法学者たちやパリサイ派の人々」つまり、熱心な宗教者や信仰者たちであったと言われている。

しかし、彼等は、最後に女に石を投げるのが出来ずに立ち去って行った。彼らをどのようにさせたのは一体何だったのだろうか。それは、イエスさまのものごとを見る目のつけどころなのである。

何度も言うことだが、イエスさまの目のつけどころは、ものごとの存

在の根源であり、人間存在の根源である。それ自身の本来の命の源なのである。そこでは、姦通する女は石で打ち殺せとか、殺さないと言われる世界ではない。また、それが正しいとか悪だとか叫ばれる世界でもない。ではどのような世界なのかと言うと、すべてがそのまま許されている世界なのである。イエスさまはその世界をありのままの姿で率直に、彼らの前に、謂うならば、「ポイト」示されたのである。それが、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」という言葉だったのである。

これが、先に芭蕉に関して引用した「現実の矛盾を超克する『高悟』から現実肯定の精神、即ち『帰俗』の姿」なのである。

私たちの存在を含めたすべてのことからは、すべてその根源において許されて在るのだ。どれほど人が力んでも、牛の前の蛙の如く、その力は及び難く、神の手の平の上に保持されているはかなき者にしか過ぎないのである。

許されてあるはかなき者である故に生きている。何と有り難き存在であることか。また、何と美しく素晴らしい存在であることだろうか。

許されてあるはかなき者である故に、さまざまな苦勞をする。喜び悲しみ、傲慢ごうまんになつたり卑下ひげしたり、人を愛したり殺したり、正義に憧れるかと思うと、忽ち悪に魅せられる。人生悲喜こもごも。しかし、神は許し、存在の根源で保持していたださっている。

イエスさまは、その世界を「神の支配」または「神の国」と言い、さらに「天国」とも表現されたが、まさに、この世界を先に述べた人々に言葉で示されたことは記したが、女に対しては、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪をおかしてはならない」

と語られたことはこそ、「神の支配」の言葉だったのである。

目のつけどころ、気のつけどころ、思いのおくところは、どのような場合に於いても間違つてはならないと思う。この世に現れたどのような一面にも、又多面をも目のつけどころとしてはならない。例えそれがどのように美しく、正しく、聖よく見えようとも、そこを目のつけどころとしてはならない。すべてそれらは現れたものであり、やがて消えていくもの、許されたものである。

どのものにも深層がある。見えない深い不思議で有り難き命輝く世界がその深層に秘められている。だが、その命の輝きは、どのものの元にもすでにとどいている。そこに目をつけよう、気をつけよう。思いを置こう。

わたしは、イエスさまによって、その世界を与えられた。これに勝る宝は、この世にも、あの世にもない。

べしるちみ

わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父は
その人を愛され、わたしと父とはその人のところに行き、一
緒に住む。
——イエスの言葉——

死んでも生きても神の内

わたしが、聖書を通しイエスさまによって与えられた大切
なことの一つは、「死んでも生きても神の内」ということであ
る。

この世のどのようなものも、ことも、みんな神の内うちに許さ
れてある、ということが本当のところなのである。ところが
私たちには、その、本当のところがなかなか見えない。なぜ
見えないのかというと、自分が見たことを自分の頭で理解し
ようとしたり、自分の欲の感情で握つかまえようとすることからであ
る。

私たちは自分の頭、つまり自分の知恵で理解することが最
も確かなことだと思ひ込んでいる。知恵はさまざま知識を
もとにして成り立っているが、その知識ももとをただせば知
恵によって生み出されたものである。とにかく、どのような
事も、知識によって分析し判断して結論を出し、それを最も
確実なことだと思う。そこで出た「否」は否だとされ「然り」
は然りとされてしまう。すべての判断の基準は知恵による。

また、わたくしたちは知らないあいだに、自分の考えのな
かに自分の欲というものが入り込んで来て、考えを支配され
てしまう。なにごとくも欲目で見たり考えたり接したりすると
決して正しい結果は出てこない。

このように、私たちは自分の知恵、自分の欲でものごとを

見てしまうので、それらに邪魔じまをされて、結局、本当のとこ
ろが見えなくなってしまふのである。

このことを、少し厳密に表現すると、私たちが見ていると
ころは、自分の知恵や欲によって判断された、一種の幻想を
あたかも本当のことのように思ひ込んでいるのだ、と言える
のではないだろうか。

すべての人が自分の知恵や欲から生み出された幻想を本当
のことだと思ひ込んで生きているわけではない。

有難いことに、私たちには、真実まこと本当のところ目覚める
機会というものが、日常の「ふとした」ときに、与えられる
ことがある。

仕事をしているとき、道を歩いているとき、ふと見た景色
の中に、偶然に聞いた言葉の中に……今までは違った世界
が見えることがある。これは誰でもが何らかのかたちで体験
しているにちがいない。

その場合、共通していることは、それらの出来事が自分の
頭ではなく、言うならば、自分の胸に響き、胸で受けとり、
胸に感じたということである。頭ではなく胸に受け取る、と
言われれば、「なるほど」と思われる方もあるかも知れない。

私たちが日頃、何気なくする仕種しぐさというものには、それぞ
れに意味があつて面白い。例えば、なにか失敗をしようと手
頭をかく人がおおい。また、「俺はなんという馬鹿者ばかものだろう」と
言つて、自分の頭を自分の手で叩く人がいる。どうも頭と
いうものは考えるということの象徴しやうしゆとしてあるのだろう。だ

から、「何か名案はないものかなあ」などと言う時には、額に手を置き
また「困った!!」とおもう時にも自然に手が頭を抱え込んでゐる。

頭が知恵ならば胸は心である。知恵が理性ならば心は魂である。そして、知恵よりも心の方がものごとを見るに、その浸透力は深く、その射程距離は遙か遠くまで及ぶように思うのはわたし一人だけではないだろう。

真を思う時、善を思う時、美を思う時、私たちは心や魂を働かせる。胸に手をあてて静かに自分自身を省みるとき自分の、偽らざる姿が浮かび上がって来る。自分の醜さ、愚かさが見えて来る。しかし、その姿は誰にも言わずに自分の胸に隠してしまう。

胸で思い見るとき、頭では見えなかった世界が見えてくる。それは、愚かさや醜さだけではない。素晴らしさや有り難さも見えてくる。

× × ×

私たちの心や魂にも目があり耳があり思考する働きがある。しかし、おおかたの人は、その働きの無視して、肉体の目や耳や頭の働きの従って生きて行こうとする。目で見て美しく、食べて美味しく、聞いて感じよく、考えて得なことにのみ関心をよせ、それらを追い求めることに一生懸命になる。だが、そのような世界は所詮は夢幻なのである。そのような世界は本当の世界ではない。それが証拠に、過ぎ去れば一切は夢のあと、である。言うならば、自分が生み出した幻想なのである。後には何も残らず、空しさだけが滲み出てくる。

自分の欲で追い求め、自分の知恵で描いたものが幻想だとすれば、心や魂の目や耳や思いで見えるもの聞くものは、実体がある本当のものなのである。本当のものは、向こうから呼びかけて来るものだ。だから、静かに、手を胸に当てて心や魂の目、目、思いを働かす時、本当の世界の音が聞こえ、その姿が現れ、悦びと平安と感謝と力と希望とが自分のう

ちに満ちてくる。そして、必ずその人は祈りに導かれる。

× × ×
本当の世界とは、神さまの世界としか言いようがない。肉体の目や耳や口や頭だけで生活をしている人は、この世だけが本当の世界で、それ以外には何も無いと思ひ込んでゐる。だから、神さまの世界などと言うと、それこそ、夢幻の世界だと言って笑う。そのような人は自分の心や魂を通して呼びかけて来る神さまの声に、心の耳を傾けようなどと夢にも思わない。それどころか、そのようなことは愚かなことだと信じている。

× × ×

私の知っているある一人の人は、所謂、この世で言うところのとても賢い人である。彼は、決して若くない、知識も豊富、経験もゆたか、正義感もあり、人情も豊かである。従って、宗教のことを語らせばとうとうと語る。だが、私は彼と話していて安心を覚えないのである。寧ろ不安すら感じる。世の中にはこのような人がいる。おそらく、私と同じような体験をなさった方、また、なされておられる方は案外おおくおありなのではないかと思う。

安心出来ない理由は彼の何処から来るのだろうか。それは他でもない、彼の言葉も行いも、そして思いも、そのすべてが自分の頭から出て来るのである。自分の知識、経験、思考、心情から出て来るのである。

だから、どれほど深く鋭く、説得力があるように思えても、所詮は自分の肉体から生み出されたものなので、何か、押しつけがましく思え、また、どこかに傲慢の雰囲気があるように思っているので、話を聞いていて安心できないのである。

宗教人、信仰人の中にもそのような人がいる。熱心な信心家と言われている人の中にもこのような人がいる。神も仏も総て自分の肉体のなか

に採り込んで、そこから語りだすのである。

私は別に一人の人を知っている。その人は学歴もない、理屈も言わない、特に人目につくような特別な行動もしない。しかし、その人と会って話していると、安心できるのである。何か力があたえられるのである。共に、とても大切な本当のもの、つまり、神さまの恵みを分かち合ったという悦びと感謝とが残るのである。彼はすべてのことを、頭ではなく心で魂で見えて聞いて受け止めているからなのだろう。

われよべば みえきたるなり

わがよぶは みえきたるものこのころのうごきのゆえならん
もつたいなしとなえんか

みえきたらんとするもの

よぶがゆえにわれもよぶ

そのものわれによぶころをうごかすごとし

これは八木重吉の詩である。彼は、頭ではなく胸、即ち心、魂で詩っている。彼は不治の病に臥しつづ、本当の世界と交わり、不安のなかに在って安心を得、有限のなかに在って無限を得、滅び行く肉体を生きつづ永遠の神に生きている。

誰でもが「ふとした」時に、自分の胸に聞こえたり見えたりする本当の声、本当の世界を大切にしたいと思う。そのとき、自分の心をかたくなにしてはいけない。忙しさにまぎれて捨てたり、忘れてはいけない。

「ふとした」ときに胸で聞いた言葉、見た世界は、今まで頭や欲で知

って来た世界とは、まったく異なった本当の世界に、私たちを導こうとする神さまからの働きかけなのである。そのとき、人は本当の世界の入り口に立ったのである。決してそこから立ち去ってはならない。本当の世界からの働きかけは、昼も夜も絶え間なく私たちの魂を通して胸に響き続けている。しかし人は現実的な知恵と自分の欲でそれらを聞かず見ることなく過ごし、遂に空しく朽ち果てて行く。

よく聞きなさい。「今日か明日、これこれの町へ行って一年

間滞在し、商売をして金もうけをしよう」と言うひとたち、あなたたは自分の命がどうなるか、明日のことは分からないのです。あなたがたは、わずかの間現われて、やがて消えて行く霧にすぎません。むしろ、あなたがたは、「神の御心であれば、生き永らえて、あのことやこのことをしよう」と言うべきです。ところが、実際は、誇り高ぶっています。このような誇りはすべて、悪いことです。人がなすべき善を知らながら、それを行わないのは、その人にとって罪です。

——新約聖書ヤコブの手紙四章十三節〜十七節——

ある金持ちの鼠が豊作だった。金持ちは、「どうしよう、作物をしまっておく場所がない」と思いめぐらしたが、やがて言った。「こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。」「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。しかし、神は、「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか」と言われた。

——新約聖書ルカ福音書十二章十六節〜二十節——

これらの聖書の言葉は私たちに對する怒りや脅しではない。そうではなく、私たちの生活のすべてに及んでいる、神さまの恵みの事実を示している言葉なのである。

これらの言葉を、頭で聞いてはいけない。頭の理屈で理解してはならない。また、頭で納得してもいけない。それは頭だけの世界のこととなる。心で、魂で、胸で聞き、受けるのである。そうすれば本当の世界が見え、本当の世界の言葉が聞こえて来る。そして、悦びと感謝との世界へ導いてくれるに違いない。

生きて来たことが、生かされて来たのだと気づく。生きていることが生かされるのだと気づく。生きて行こうと思うことが、生かされて行くのだ、と気づくようになる。

しかし、もしそのように気づくことができなければ、その人は未だに頭で理解しようとしているのだ。胸で魂で心で聞こうとすればよい。何度も何度も胸で魂で心で先の言葉を聞くのである。その時、この御言葉が、人を責めたり、脅したりしてはならず、すべてのことに及ぶ神さまの愛の御手の働きの事実が示されることを知るに至るにちがいない。

すべての過去、現在、未来が神の手の内に保持されている。何と有り難いことであろうか。どのような人も過去、現在、未来の一片たりとも纏まえることなど出来ない。なんと有り難きことであろうか。人はただ、その与えられた道をその分に応じて生かされるだけである。人が為すどのような偉大なことも、その分に応じてさせて 頂いただけである。神は一切の創造者、保持者、完成者である。なんと有り難きことであろうか。

この大宇宙は神の御手の業である。そこには神の命の息づかいが響い

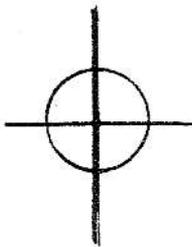
ている。言わず語らず、その声は聞こえなくても、その響きは宇宙の隅々にまで及んでいる。頭はそれを聞くことも観ることも出来ない。ただ胸だけが、魂と心だけがそれを聞き見ることが出来る。

神の御手に成るものは、永遠ではない。創造され、保持されそのつとめを果たして消えて行く。地上にあるものもその道を進む。国家も文化も宗教も、人が生み出した一切は消えて行く。地球が消えて行くと同時にすべてが消えて行く。太陽も宇宙の星々も消えて行き、神の栄光だけが永遠に光り輝く。すべては、神の命の輝き、神の栄光の印だったのである。それを知らずに、自分自身の栄光だと思い込み、感謝なく、畏敬の思いなく生きる者はわざわいだ。そのような人は自分自身の愚かさで自分自身を裁く。

神は誰も裁かれない。神は創造者、保持者、完成者である。過去も現在も未来もすべて神のものである。私たちは、死んでも生きても神の内にいる。ここにこそ大安心がある。イエスさまはその命を生きて私に示し、お与え下さった。大感謝である。

イエスさまは言われた。

わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたはこころを騒がせるな、おじけるな。



べしるちるみ

— 聖書 —
神のなさることは、すべて時になつて美しい。

運命

「これも私の運命なのでしょうね」と、その男性は苦笑しながら語られた。彼には小学生と中学生の二人の子供がいた。まだ死ぬことはできないし、死にたくもない。でも、ガンという病は彼を地上から取り去ってしまった。彼は勿論のこと人々も無念がった。しかし、誰もこの出来事に対してどうすることもできず、ただ、悲しむだけだった。

× ×
人にはどうすることも出来ない力が、私たちの存在や行為に働いて、私たちの思いや願いとは全く別な状態に運んで行ってしまふことがある。その結果、人生に大変化が生じ不幸になつたり幸福になつたりする。このような力のことを私たちは運命と呼んでいる。

× ×
「運命」とは何か。また、この「運命」にどのように私たちは対処すればよいのだろうか。ひとつ、「運命」を自分の手の平に乗せて、少し見つめてみよう。

× ×
運命という文字は「運」と「命」という漢字から成っているが、その「運」とは「めぐる」ことであり、また「めぐり会う」と言うことなのだと言われている。

× ×
私たちの人生は考えてみると、さまざまな人、物、事、それに場などとのめぐり会いによって成りたつていて、私は、日本という場に生まれたが、それは日本という場と

のめぐり会いだといえる。また、両親のもとで、さまざまなものをそこから受け継いで、この顔と身体を持って生まれて来たのである。これは両親とのめぐり会いなのである。しかも、この時代にめぐり会って今生きている。「運」とはこのようなめぐり会いのことなのである。

× ×
では「命」とはどういうことなのかと言うと、「運」というめぐり会いが、人の意志ではどうすることも出来ない決定的なことがらであるので、それを「命」と言うのである。

× ×
このように、漢字の運命とは、私たちの意志とは関係なく人に与えられ、備えられ加わつて来る出来事としての力であると言える。

× ×
それにしても、その古代ギリシヤの叙事詩人ヘシオドスは運命をつかさどる三人の女神について次のように語っている。そうである。

× ×
その一人のクロトという女神は、人間の誕生をつかさどつて命の糸を紡ぎだし、今一人のラケシスという女神は人間ひとりひとりの生涯を思うままにあやつり、いちばん年上のアトロポスという女神は、人間の命の糸を断ち切る役目に当たっているというのである。

× ×
このようにして、すべての人間の運命は神々に一切をにぎられ、「分け前」として与えられ、定められた分だけしか生きるものが出来ないものが人なのであるというのである。だから、ヘシオドスは運命の神をモイラと称した。そのモイラとは、本来「分け前」を意味した言葉だということ。

× ×
ここで、ついにながら、字典から紹介しておく、英語やフランス語の運命という言葉の語源であるラテン語は「神々の判決」ということであり、さらに、ドイツ語の運命という言葉の語源も「送る」という言葉からきているというのである。

る。また、目を転じて、中国の老荘思想においても永遠の宇宙的理法であるタオによる天命思想が運命論としてあるが、このような難しい理屈は、無知である私が書物の受け売りをして、ここで語るよりも、それぞれの書物をご覧いただければよいとおもう。

とにかく、運命とは、どの場合においても、人の意志とは別に人間を支配する力や定めのことと考えられているようである。

それにしても、この「運命」ということをどのように理解し、如何に対処すればよいだろうか。

しかし、この問題は今に始まったことではない。人間が自分の生きているということに自覚したその時から始まった。そして、あらゆる人間の歴史的な営みの努力は、人間ひとりひとりが背負って生きている「運命」との戦いがその根底にあったと言える。宗教、哲学、科学、政治、経済、医学、芸術など、人間の努力は、運命との戦いの証である。そして今もその戦いは続いている。誰も、これを見過ごしには出来ない。私たちが運命と言うことについてどのような態度を示すかは、その当否は別にして、自分自身の人生にたいする責任ではないだろうか。

それにしても、運命とは、はたして私たちにとって、どうにも出来ないものなのだろうか。どうにも出来ないものであるという捕らえ方から運命にたいする暗いイメージが生まれてくるのだとおもう。

どうにもできない暗いものが運命なのだ、という考えは、はたして当を得たものなのだろうか。初めから、運命について、私たちは勝手に決めつけ、思い込んでいようなことはないだろうか。

もし、そうだとすれば、人は、自分の勝手な思い込みで作出した運命という幻想に戦いを挑み、その結果、失望したり、落胆したりしていることになる。

たしかに、人生には予期せぬことが起こる。苦しいこと、哀しい

ることが出来ない執念を残しての死は暗黒への出発の死となる。そのとき、その者にとって運命的な生も死も無化されてしまう。ここに人間の誇りがありうる。

たしかに、人にはどうすることも出来ないことが起る。しかし、それをじっと凝視していると、必ず恵みが見えて来る。恵みが見えて来ないのは、それに振り回されるからだ。その時、人は迷う。迷うとすべてが混乱して破滅に向かう。

もともと、人間は自分で自分をどうすることも出来ない存在なのである。人間は一定の枠の中で限定されて生きており、限定されることによって生きていくということを自覚出来るように成っているのだ。そのことを知る時、限定するものはその人にとって最早、邪魔ものではなくなくなり、恵みとなる。

例えば、私たちの身体はさまざまな限定のもとに出来ている。足は二本あり、腕も二本、手の指は十本しかない。目は二つ顔面にある。口があり鼻がある。胃腸があり肺があり心臓がある……とにかく人間はそれらによって限定されている。しかし、一方この限定しているものが人間を造り上げているのだ。このような限定は災いなことではなくて、人間にとって恵みなのである。しかし、足が六本もあればよいと願い、目が頭の後ろについていけばよいのと願うとき、二本の足や二つの顔面の目という限定が不足なことと思えて来る。「たった、二本しか足がない」とか「顔面にしか目がついていない」と不満をいうようになる。そのとき、私たちの身体を限定している運命的なそれが、その人にとって逃れられない疎ましいこととなる。しかし、それは、その人が運命に対していまだく勝手な幻想にしかすぎないのだ。

わたしは、指が三本しかない人を知っている。その人はいろいろな事情があって、若いとき走って来る電車で自分の身を投げ込み自殺をはかった。しかし、九死に一生を得たが、気がついたら両足が膝上から切断

され、右手の指が三本だけ残ったのである。その後、聖書をとおし、イエスさまによる救いに与かり、みごとに絶望の人生から立ち直った。その人はやがて、おおくの人々に自分の体験を語り出して、今は外国まで出掛けて行って信仰に生きる喜びを語り続けている。その方は喜びに満ちて、「皆さん、わたしには、指が三本もあるのです」という。

特異な体験をして、気がついたら指三本の不自由な身になっていたにも関わらず、「皆さん、私には、指が三本もあるのです」とその人が語るとき、その人は、みごとに自分の運命を無化してしまっている。それどころか自分を限定しているものを恵みに変えて、不自由な身体の実現にも関わらず、そこで喜んでいく。

さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた、弟子たちがイエスに尋ねた。「師よ、この人が生まれつき目の見えないのは、だれが罪をおかしたからですか、本人ですか。それとも、両親ですか」。イエスお答えになった。「本人が罪をおかしたからでも、両親が罪をおかしたからでもない。神の業がこの人に現れるためである。……」。こう言うことから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。そして、「シロアムの池に行つて洗いなさい」と言われた。そこで彼は行つて洗い、目が見えるようになって帰って行った。

ヨハネ福音書九章一節と七節

「なぜ、この人は目が見えない者として生まれてきたのだろうか」という、弟子たちの問いは、私たちの問いでもある。

この問いは重い問いだ。なぜならば、それは、人生の秘密の扉を開けようとするような行為だからである。その扉を開けるなら、人生の深淵にある秘密の一切が明らかになるような気がする。誰もが、自分の心の

奥に秘めている自己の存在の不安に対する答えが、与えられるようにも思う。

だから、私たちは、いろいろと思ひめぐらす。弟子たちもそうであった。「本人に原因があるのか。それとも、親や先祖になんらかの原因があるのか」。人はその理由を見つけ出すために、人間の能力をフル回転して捜し求める。しかし、確証できるものはなにひとつない。存在の根本的な不安は解決されないままである。

× × ×
おそらく、彼らは、イエスさまの答えを、息を殺して待ったにちがいない。

イエスさまはキツパリと言われた。「本人の罪でも、その他一切の罪でもない」と。これは、言うならば、「人の考え及ぶ領域ではない」と言うことである。否、もっと積極的に「人間が観念する領域のことから無いにも関わらず、人が自我の観念で解明しようとすることは、なにごとぞ!! 愚か者め、自分の身を知れ!!」と言うことである。

すべてのことに先立って、まず、神の大決定がある。この事実の前には人は何も語れない。イエスさまはこの世界を「然り、然り、否、否」の世界と言われた。また、「アルパであり、オメガである。始めであり、終わりである」世界と言われた。さらに、「神さまのお恵みの世界」つまり「神の国」と申された。それは、命と愛と真実とが滾る世界である。寸分の狂いもなく光り輝く栄光の世界である。すべてを造り出し、すべてを保持し、すべてを完成してくださる栄光と力に満ちた大安心の世界である。

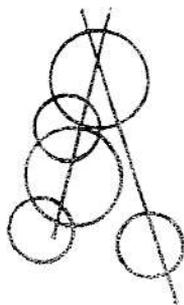
人間には、入り込んでほならない世界がある。にも関わらず入りこもうとするのは、人間の罪である。また、人間には入り込めない世界がある。にも関わらず入り込もうとするのは、人間の奢りである。運命という幻は、この罪と奢りから生まれて来る。

たしかに、イエスさまが言われるとおおり、本人の罪でもなく、その他

の何かの罪でもないのだ。そこには、人が触れることが出来ない神の御意志があるのだ。それに、人が詮索してはならない。

イエスさまは、続けて言われた。「神の業がこの人に明確になるためである」と言いつつ癒された。

なんと明快な答えであろうか。人が入り込めない世界、入り込んでほならない世界のなんたるかが、ここに具体的に提示された。目の見えなかった人の目が開いた。これほどの愛と恵みの力と命とが、私たちの脚下に漲っているのである。この事実に開眼させられるとき、最早、運命は跡形もなく消え去ってしまい、そのままをそのままとして戴ける。大平安が生きる根底に満ちてくることであろう。



べしるちみ

キリストの内にいる人は皆罪をおかしません
— 聖書 —

まず神の支配がある

昨年、東欧で起こった社会主義国家の崩壊ということは多くの人々を驚かした。

しかし、ものごとを正しく見ていた人々にとっては、それは当然の出来事であったといえる。その理由を一言でいうならば、そこには人間の社会を構成する原理として無理があったということである。どのような場合においても、そこに無理があると、それはいつか必ず故障が生ずる。

無理とは、道理に通^たっていかないことである。なにごとに於いても必ずそこにはそれに相応しい正しい道筋というものがある。その道筋とは人が造り出したものでなく、言わば初めから備えられているものであるといえる。

「天の命ずるこれを性と謂い、性に率^しうをこれ道と謂い道を修むるをこれ教えと謂う。」とは、中国の古典「中庸」が示すところである。

先の中庸に言う「天の命ずる」ということを、「神の定めるところ」と言うように、私なりに理解するならば、ものごとの筋道とは、私たちの思いを超えてすでに神さまが備えて下さっている道筋であり、道理であるといえる。それを聖書的に言うならば「神の御意志」のことである。

神さまが備えられた道理は宇宙一杯に広がって存在している。従って、私たちひとりひとりの生活の場にもそれはある。例えば、食べること、飲むこと、排泄すること、睡

眠をとること、手足を動かすこと、休息をとること。これらは私たちが生きて行くうえで与えられた生き方の基本的な道理である。それらのどの一つにも無理をすると、肉体的な健康は損なわれてしまう。暴飲暴食をして健康を損なう人、働き過ぎて異常を来たす人、人が健康を害するには必ずそこには、なにかに於いて道理から外れていることが原因になっている。

道理から外れて異常を来たすことは肉体の健康のことだけではない。ものの方や考え方に於いても同じことが言える。極端に偏った考え方や見方をする場合にも、その人の精神的な健康は損なわれる。また、神経症的な傾向が強くと、いつも不安を自分の内に持っていて、そこからいろいろの不健康な状態が生まれて来る。不眠、頭痛、感覚異常、疲労感、胃腸障害、目まい、記憶不良、注意散漫、ヒステリー、対人恐怖、不潔恐怖、不完全恐怖……といった強迫神経症のさまざま。まな身心の異常が生まれて来る。

一つの主義や主張を絶対に正しいと信じて熱狂的にそれに従い、それが持つ価値基準ですべてのものごとを判断して正邪、善悪をきめつけようとする人達がいる。そのような場合に先に述べた神経症的な症状がただ、個人的な異常にとどまっているのに対して、これは社会的な問題を引き起こすことになる。例えば、そのような人たちが政治の権力を持つ時その主義や主張に従わない者は、すべて悪または敵となつて抹殺されてしまうという悲劇が生じる。事実、このようなことが色々な国でかつて起こり、未だに起こりつつあることは多くの人達がよく知るところである。しかし、そういう国家や政治体制は、人間の在り方として原理的に道理から外れて無理

をしてるので、いずれは崩壊していくことは当然の理なのである。この度起こった社会主義国の崩壊もその一つの例なのである。

このようなことは宗教の世界に於いても同じことが言える。熱狂主義的な宗教集団が、人々をどれほど異常な人間に変えてしまふかは、一々例をあげなくても、私たちがすでによく知っているところである。

ある宗教を信じることで、その家庭が崩壊したり、社会的な迷惑になったり、あげくの果ては殺人までしかねないような状況を生み出してることがある。ましてや、そういう宗教集団が政治的な権力の座に着いたり、政治権力と手を握ったりするとき、国家規模で弾圧や差別が行なわれ、対国家との間で戦争もしかねない状況を生み出すことは、先に述べた、独善的熱狂主義の政治体制がもたらす過酷な状況と同じであるといえる。

私たちの一切の思いを超えて、既にある道理または道筋、——「天の命するところ」または「神の定めるところ」「神の御意志」——に外れる時それが、どれほど美しく、賢く、強く、正しく、立派に見えても、そこには無理があり、それゆえに必ず、自らの矛盾によって自己崩壊してしまふことは自明の事なのである。このことについて、もうすこし私たちの身近なことがらをみてみよう。

例えば夫婦の関わりに於いて、もしどちらか一方の忍耐だけが、その夫婦を支えているならば、いつかその夫婦は崩壊する。また、親子の關係に於いて、親の側の一方的な支配のもとにある子供があるとすれば、その親子關係は必ず崩壊する。このことは友達關係においても同じことである。

また、商業の道に於いても、適性な利益というものがあって、それ以上の上の不当な利益を生ずる商売の状況は、必ず問題を生むことになる。

以上いろいろと、既に備わって在るものごとの道理、筋道、——天の命するところ、神の定めるところ、神の御意志——に外れる時、それは必ず崩壊すると語ってきたが、では、それぞれに備わっている道理や筋道とは何なのであろうか。

それは「愛」である。愛こそがすべての関わりを支えている道理なのである。例えば、ひとりの人が、ある人と関わる時に愛が働かなくてはその関わりは必ず潰れてしまう。なぜだろうか。

人は自分ひとりで自分にはなれない、相手がいて、その者との関わりにおいてこそ人は自分になることができる。嘘だと思えば、自分を誰もいない、なにも無いところに置いてみるとよい。自分の存在はそこでは無意味となる。

人は、元々関わりの中に置かれている。それが人であったり物であったり、とにかく、私たちはそれらとの関わりに於いて、わたしとなることができる存在なのである。この事は理屈ではなく、単純な事実である。その関わりこそ愛の道理である。愛の道理が人と人。人と物となれば、その関わりは成り立たず、従って、相手は勿論のこと、自分自身の存在も成り立たなくなる。そればかりか、全世界はいうに及ばず宇宙そのものも存在出来ないのである。

このような愛の道理が、私たちの一切の思いに先立って、敵として在るのだ。これは、わたしたちが存在している根底に在る神の大決定なのである。誰もこの大決定から抜け出して存在することはできない。そこでのみ、人は生きることができるのであって、その他の何処においても生きることは出来ない。

それゆえに、イエスさまは、私たちの在り方について次のように示された。

あなたがたは、「然り、然り」「否、否」と言いなさい。
それ以上のことは、悪い者からである。

——マタイ福音書五章三七節——

私たちの思いや考え以前に厳然としてある道理は相撲に於ける土俵のようなものである。また、野球におけるベースのようなものである。相撲を取る者も、見る者も、判定する者もすべてが土俵に対しては「然り然り、否、否」としか言えない。それに対しては誰も一言半句といえども語ることはできない。もし、土俵に対する認識がひとりひとり違えば相撲という競技はなりたたなくなる。このことは野球のベースについても同じである。

土俵やベース、それについてのルールがすべての者に先立って厳然と存在するので、それらのスポーツは行う者も観るものも共に楽しいのである。それらは、言わば相撲や野球を成り立たせている根底にある道理であり、筋道なのである。それ故に、それらは、相撲や野球にとって恵みであり、愛そのものであると言える。それがなければ相撲も野球も全く成り立たない。だから、それに対して何かの意見を出すならば、その者はその競技を破壊する者となり、当事者や観客から一斉に破壊者として攻撃をうけることになる。

私たちは感性や悟性や理性と言われる素晴らしい能力を持っている。それらを働かせて、考えたり、判断したり、決断したりして技術を身につけているいろいろなものを造り、より楽しく快適な生活を日々楽しんでいく。このような作業は大切であり、努力して押し進めていかなければならない。

だが、それらの努力のみで私たちの存在は成り立っているのではない。また、それらの働きが、私という者を支えている根底でもない。それらは、言わば、相撲に於いて、どのように業をなすなら相手を倒すことが出来るかと考え、業をすすめるようなことである。自分の考えも業も、その結果の勝敗も、そのすべてを有効にさせているのは当の土俵そのものなのであることを忘れてはならない。土俵という道理がなければ、どのような考えも業も、勝ち負けもないのだということを見落としてはなら

ない。

相撲に於ける土俵の道理が、相撲の一切に先んじて相撲を相撲たらしめているように、私たちの生きていくということも、私たちの人生に對するすべての努力に先んじて、道理が愛として与えられ備えられていけばこそ、私たちの一切の努力、即ち、学問、芸術、科学、政治、経済、文学、宗教、肉体、精神……などの努力は有効に成り立っているのである。

この道理は、正に神の大決定である。それは恵みとして愛として全宇宙に及んでいるのである。と思う時、今、私の胸に光り輝く天界より、かの聖書の巻頭の言葉が厳肅さをもって響き来るのを覚える。

元始めに神、天地を創造り給えり

——創世記一章一節——

神の創造の業は、今も総てのもの根底に道理として躍動しているのである。それをイエスさまは「神の支配（神の國）」と言われた。

神の國（神の支配）は、ある人が地に種を蒔くようなものである。夜昼、寝起きしている間に、種は芽を出して育って行くが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。地はおのずから実を結ばせる。

神の國（神の支配）を何に比べようか。また、どんな譬えで言いあらわそうか。それは、一粒のからし種のようなものである。蒔かれる時には、地上のどんな種よりも小さいが、まかれると、成長してどんな種よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほどになる。

——マルコ福音書四節二六節以下——

存在の根底に躍動する神の支配は、私たちには知ることはできない。また、それを観ることが出来ても、とるに足りない程に小さくつまらな

いものに見える。しかし、それは、偉大なるものとして鳥（総てのもの）を支える根底となる。

イエスさまは、次のようにも言われた。

何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことと思わずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思わずらうな。……空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの天の父（神）は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命を延ばすことができようか。……野の花がどうして育っているか考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない……きよう生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあるうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。だから、なにを食べようか、何を飲もうか、あるいは、何を着ようかと言って思わずらうな。これらのものはみな、あなたがたの天の父（神）はことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。

まず、神の国（神の支配）と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だから、明日のことを思わずらうな。明日のことは、あす自身が思わずらうであろう。一日の苦勞は、一日だけで十分である。

— マタイ福音書六章二五節以下 —

結局、私たちは、自分の人生に対して根本的には何も出来ない存在な

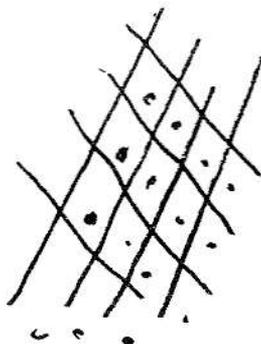
のである。生まれるということ、死ぬということにおいてそれが証明されている。神の支配、神の御意志のもとで生まれ、そして死ぬのである。この世に送り出された方は、しばしの間この世に定める時の間だけ保持しつつその存在を許し、また、この世からその手元に引き戻されるのである。

わたしたちは、すべてを受けていくほかない。それが私たちの存在する命の営みの根本的な真相なのである。この事実をよくよく弁えていなくてはならないと思う。

最後に、つぎのような言葉を思い出す。

「天の道は、争わずして善く勝ち、言わずして善く応え、召さずして善く来たり、^戰然（おおまか）として善く謀る。天網恢恢、疎にして失わず」

— 老子 —



べしるちるみ

予らかな応答は憤りを静め
傷つける言葉は怒りをあおる

— 聖書 —

あるがままの姿で手を合わす

イエスさまはある時、神の愛の働きについて、次のようにお示しになった。

ある家の主人が、自分のぶどう園に労働者を雇うために夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである。彼は労働者たちと、一日一デナリーの賃銀の約束をして、葡萄園に送った。それから九時頃に出て行って、他の人々が市場で何もせず立っているのを見た。そして、その人たちに言った。「あなたがたもぶどう園に行きなさい。相당한賃金を払うから」。そこで彼らは出かけて行った。主人はまた、十二時ごろと三時ごろとに出て行って、同じようにした。五時ごろまた出て行くと、まだ立っている人々を見たので彼らに言った。「でも何もしないで、一日中ここに立っていたのか」。彼らが「だれもわたしたちを雇ってくれませんか」と答えたので、その人に言った。「あなたがたも、ぶどう園に行きなさい」。さて、夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った。「労働者たちを呼びなさい。そして、最後に来た人々からはじめて順々に最初に来た人々にわたるように、賃銀を払ってやりなさい」。そこで五時ごろに雇われた人々がきて、それぞれ一デナリずつの賃銀をもらった。ところが、最初の人々がきて、もっと多くもらえらるだろうと思っていたのに、彼らも一デナリずつもらっただけ

であった。もらったとき、家の主人にむかって不平をもらして言った。「この最後の者たちは一時間しか働かなかつたのに、あなたは一日じゅう、労働と暑さを辛抱したわたしたちと同じ扱いをなさいました」。そこで彼はその独りに答えて言った。「友よ。わたしはあなたに対して不正をしていない。あなたはわたしと一デナリの約束をしたではないか。自分の賃銀をもらって行きなさい。わたしはこの最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。自分の物を自分がしたいようにするのは、当たり前ではないか。それともわたしが気前よくしているの、妬ましく思うのか。このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであらう。

— マタイによる福音書二十章一〜十六節 —

ここで語られていることは、世間の通念からすれば、とても非常識なことのように見える。

一日じゅう汗水流して働いていた者と、仕事が終わるころに来て、ちょっぴりしか働かなかつた者とが同じ賃銀では、一方はあまりにも可愛そうだと思う。また、一方はあまりにも得をしすぎたと思う。そして、主人はハッキリと計算をすべきであると思う。

たしかに、この出来事はすべてが日常の理屈に合わないことばかりである。

それにしても、イエス様はこれを語るることによって何を私たちに示そうとなされたのだろうか。

イエス様の言葉を聞く時、私たちは世間の通念とか常識な

どというものを捨てなくてはならない。そんなものに囚われていては、イエスさまの言われる本当のところを掴まえることは出来ない。なぜかと言うと、イエス様が示しておいでになる事実は、世間を超えているからである。否、世間の常識では掴まえることが出来ない事柄なのである。イエスさまが示してくださることは、「神は愛である」という、一つの事実のみである。それは決して理屈ではない。イエスさまだけの思い込みでもない。「神は愛である」ということは、総てのものにとってもまた、すべての心にとりてても事実なのである。

すべてのもので成り立っているのである。もし、私たちにあって常識というものがあつてならば、このような「神は愛である」ということによくよく気付いていることこそが「常識」なのだと言える。

私たちの思いや考え、さらに、私たちの行いなどに先立っている事実というものが沢山ある。私という者が生まれたということもその一つである。私が生まれたということは、わたしは勿論、他のどのような者の考えや思いや行いに先立っている出来事なのである。両親がいたではないかと言う人があるかも知れない。しかし、両親が自ら手を下して私という者を造形したのではないのだ。ましてや、両親にとつて「私」という子供でなくてはならない、などという思いや考えは全くなかった。産んでみたら「この子」であつたのであり、生まれてみたら「私」であつたのである。まさしく、わたしが生まれるということは、すべての者やことに先立って在つたことなのである。

また、地球の自然の営みも私たちの思いや考えに先立ってある事柄なのである。雨が降ること、太陽が照ること、空気があること、風が吹くこと、さまざまな動物や植物があること……。

雨が降らなくても、降りすぎても、風が吹かなくても、吹きすぎてもまた、太陽が照らなくても、照りすぎても、私たちの命は危機にさらされる。このような事柄は宇宙規模にたらなる事柄なのであつて、科学技術が発達したからどうにか出来るというような次元の事柄とは根本的に違ふのである。

先のおどろきの話でイエス様がお示しになつておられることは、人があれこれと思ひめぐらす前に確実に働いている神の愛である。一日じゅう働こうが、ほんの少しだけ働こうが、その人間の側の働きとは全く関係なく、降り注がれつづける神の絶対的な愛の事実が、どれほどのことであるかということを示されたのである。それは、私たちが持っているこの世の通念も常識もはるかに超えている。この世の私たちの尺度では計り知る事ができない神の事実なのである。

この神の事実が、人のすべてを支え保持しているのだ。それは、海の上を行く船に例えるならば、船も海も支えて保持しているものにあたる。海が船を支え保持しているのではない。海そのものを支え保持して船を走らせることを許しているのが神の愛の働きなのである。

この神の愛の働きの内に在つて、自分がいま生きてるのであると目覚めることは、その人にとって無上の喜びとある。

人は世間の通念や常識、さらに自分の好みでイエス様や聖書を分別しようとする。曰く「このようなことは信ずることはできない」。曰く「キリスト教は日本人になじまない」。曰く「その教えは現実的ではなく甘い」などと。

この世の考えや思いに囚われ、この世にへばりつき、地にはいつくばり、そこを自分のすべてを生きる場所だと思ひ込み、自分を自分で生き

ようとしてゐる者には、神の愛は見えない。そのような者は、世間の通念や常識に生きるだけである。

人はいつても、物事の表面だけを見て、軽率に感情と欲と我で走る。好き、嫌い、損、得、自分勝手。そうすることによって、事柄の内深くに秘められて在る真実を見失う。否、真実が在ることすら夢にも思わない。正に、それは、イエス様が言われるとおりでである。「彼らは、見ても見ず。聞いても聞かず。ひるがえって、救われることはない」と。

このような愚かは、私たちの常である。しかし、「神が愛である」とことを自分が生きている土台に於いて知る者は、「神が愛である」ということに気付くことなく生きて来た自分の愚かさに目覚める。だから親鸞は自らを「愚鈍親鸞」と言い、日蓮は自らを「日本第一のえせもの」と言った。そして使徒パウロは自らを「罪に滅ぶべき死の身体」と言った。彼らは、それぞれに自分の土台に神の愛を見たので、そのように自らを言えたのである。それは、嘆きの言葉ではなく、感謝と喜びの歓声でもあるのだ。己自身がどれほどの愛と恵みと真実に富むものの中に生かされて在るかということについての告白であり、それに対する讃歌でもある。

先のおどう園の出来事を中心は、主人の行いにある。労働者の働きのどのような条件にも関わらず、すべてを抱えてしまう。そこでは、人が抱く損得、好き嫌い、善悪、理屈など一切ない。人が語り行う愛も、ここでは色褪せて無きが如くになってしまふ。ただ、主人がひたすらすべての者に等しく降り注ぐ愛だけである。そして、この愛こそが、すべてのものを生かすのである。

私たちひとりひとりが、おどう園に在る労働者なのである。さまざまな欠点や長所をもっている。にも関わらず、愛に満ちあふれる神は、悪

人にも善人にも日を照らし雨を降りそいでくださっている。神は限り無く私たちを顧みて下さり、願いをかけてくださる。

罪を犯す時も、怒るときも、嘘をつく時も、神に不信を持ち敵対するときでさえ、そのような私たちの思いに関係なく、神は愛と恵みの内に抱きかかえていてくださる。

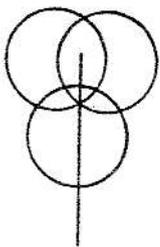
宗教も信仰も、教会やその教義から始まるものではない。人が「神は愛である」という事実、自分の生活において自分が気付くときにのみ自分の内から信仰は芽ぶき出す。そして、聖書や教会の語ることに真実を目覚めるのである。その信仰は、その人を造り変える。その人は、「神は愛である」という愛の事実を抱き抱えられて大安心を得る。

愛は死よりも強い。愛は憎しみよりも強い。愛は怒りよりも強い。愛は一切の不安を取り除く。愛は練達を生み、忍耐を生み希望を与える。

人が「人の愛だけに」生きるかぎり救われることはない。しかし「神は愛」に生かされる時「人の愛」「神の愛」に聖められ、人は救われる。

イエス様は、おどう園の主人の姿を御自分の生き様によって示すことにより、神の愛を私たちに悟らせようとなされた。

私たちはみんな神に愛され、生かされ、許され、支えられているのである。あるがままの自分の姿で手を合わせて感謝したいと思う。



みちしるべ

神の知恵の前では金も砂粒にすぎず
銀も泥に等しい

—聖書—

よく生きるための秘訣ひけつ

自分にとって最も身近な出来事とは、自分が生きているという、ことである。自分が生きているということは、誰にも代わってもらえない。夫婦であっても親子であっても、自分の生は、それぞれ自分自身で引き受けなければならぬ。

自分にとって最も身近な出来事とは、自分が生きているということであるが、それは、自分にとってただの一回切りの出来事でもある。どのような人も、自分の生を後戻りさせることは出来ない。

代わってもらっても繰り返すことも出来ない出来事を生きているのが、私たちの人生である。よくよく考えてみると自分が生きているということは大変な出来事なのである。にもかかわらず、私たちは自分の生をそれほど大切にしない。それは、おそらく、自分の生が自分自身にとってそれほど大変な出来事なのか、ということに、よく気がついていないからだと思う。

私たちは、「自分が生きている」ということを当たり前のこととして受け入れ、そこから、自分の生を始める。言うならば、「気がついたら生きているのだから生きるだけさ」といった調子で自分の生を生きているのではあるまいか。その

ような生き方に欠落していることは、自分が今生きているということの有り難さとか、意味とか、抛り所とか、不思議さといった思いである。

「そのようなひ、ち、め、ん、ど、く、さ、い、ことを考えないで、楽しく生きましようや」と、多くの人が言うのが聞こえて来そうであるが、私は今、そのような生き方を善いとか悪いとか言っているのではない。ただ、自分が生きているという、自分自身にとって最も身近な自分の出来事を、少し落ち着いて見つめて見ると、それまでは気付くことのなかった、自分が生きている根っこの部分が見え出して来るということを言っているのである。

気がついたら生きていたのだから生きるだけ、という考えで自分の生を生きている者は、結局、自分の感覚の欲を満たすことだけに生きることになる。面白く楽しくこの世を生きて行くために、勉強をし、働き、金銭を得、肉体の健康に気をくばり、地位や名譽や権力を得る、という言葉は、目先の事へのみ関心をもって、自分の生きるすべてをそのための満足に費やし、そのように生きること何の疑問も覚えることがない。

「自分が生きている」ということを、当たり前のこととして、すべてをその思いから始めてはならないと思う。そのような人の生き方は、海の波間に漂う浮き草のように、生きる抛り所もなければ確かな行き先もなく、ただ自分の満足のためだけに生きて空しくさ迷う、そのさ迷うすがたは、この世を去った後もいつまでも続く。

「自分が生きている」のではない。「自分は生かされてい

る」のである。これが、自分が生きているという出来事の本当の姿なのである。

代替え出来ず、[×] 反復も出来ない一回切りの自分の生を、よく生きるための秘訣は「自分が生かされている」ということに気付いて生きはじめることである。

そのとき、人は人生のさまざまな出来事が持つ自分に対する意味がハッキリと領解できるようにする。そればかりではなく、自分が持っている知能、感情、肉体、意志のすべてが、何のために自分に備えられているのかという秘密が領解できるようにする。

× ×
いつも言うことだが、すべての人は過去、現在、未来へと壮大な人生の旅をしているのである。過去とは生前の時であり、現在とはこの世の時である。また未来とはこの世を超えた時のことである。永遠の過去から永遠の未来へと、すべての人は人生の旅をしている。したがって、自分の人生とはこの世だけのことではない。この世だけに自分の人生を矮小化してはならない。私たちの命の営みは、この世だけに限定してしまふような軽いものではないのだ。しかし、人は自分の命をこの世だけに閉じ込めてしまい、自分を小さく果敢ない者として、自分自身の命の営みを自分の手で価値無きものとしてしまふ。

「私たちの国籍は天に在り」と使徒パウロは言った。また、「この世では旅人である」とも言う。(ピリピ三、二〇。ヘブル十一、十三。第一ペテロ二、十一)この世に生きているのは旅の途上での一時的滞在者としていたのだとパウロは言うのである。

たしかに、私たちの壮大な命の営みとしての人生の旅におけるこの世の位置づけは、言うならば「通過地点」にしかすぎない。しかし、通過

地点は、先に進むためにどうしても通らなければならない場として、とても大切な処でもある。その場をよく生きる者だけが先へと進むことができるのである。それは正に、今日という日を良く生きる者だけが明日という日をより良く生きられるのと同じである。今日という日は明日への入口である。この世は次の世への入口なのであることを決して忘れてはならない。だから、聖書は私たちにこの世で地の塩のように、世の光りのように生きることを勧めている。

× ×
この世で良く生きるとはどのように生きるとをいうのだろうか。それは、次の世に良く進むことが出来るような生き方をすることである。では、その生き方とは具体的にどのようなことなのだろうか。

× ×
聖書は先ず、智慧を持ちなさいと言う。だが、それはこの世の知恵のことではない。そのような智慧をいくら持っても、所詮はこの世のことしか見えない。聖書がいう智慧とは、この世の物事に秘められた人の魂を豊かにしようとする神の恵みを知る智慧のことである。この世の智慧では神の恵みを知ることが出来ない。この世の知恵はいつも欲と手を結ぶのが落ちである。しかし、神の智慧は人の魂を光り輝かせ、この世を超えて喜びと平安とに人を導く。聖書は、その智慧はイエス・キリストによって人々に示され、イエス・キリストを信じることによって得ることができると言う。

× ×
イエス・キリストはその智慧を生き、自らその智慧となられた。

空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの天の父(神)は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。あなたがたのうち

だれが思いわずらったからとて、自分の命をわずかでも延ばすことができようか。

野の花がどうして育っているか、考えてみるがよい。働きもせず、細^こもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華^{栄華}を極めたときのソロモン王でさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった。今日はえて明日には炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる……

× ×
マタイ福音書六章二一節以下

空を飛ぶ鳥、地に芽吹く草や花、それらは、ただ漠然とそこに在るのではない。それらはすべて神の命の躍動^{躍動}とその恵みとを語り示しているのである。その事実をそこに見て知ることが神の智慧なのである。

私たちが見るもの聞くもの、味わうもの嗅ぐもの、さらに触れるものはいかに及ばず、自らの身体そのものを含む一切の出来事は、偶然にそこに在るのではない。それらはすべて、神の命の躍動と恵みとをあますところなく示しているのである。その事実に関眼せしめる働きをするものが神の智慧なのである。

イエスさまは、それを見ておられた。だから「見るがよい」と言われるが、その意味は「悟るがよい」という内容である。

人は、見ても見ず、聞いても聞かず、それゆえに救われることがないとイエスさまは悲しまれる。本当にその通りだと思ふ。見て自分を樂しませ、味わって舌や腹を満足させ、触れて感覚を悦ばせるだけで終わるそれだけでは見たことにならない。味わったことにはならない。触れたことにはならない。それだけでは深く魂の養いにならない。神の命の世界に自分の魂を進める養いにならない。

× ×
神の智慧に生きるものには、この世のすべてのことがらは、自分の魂

を養い神の命の世界へと導くための道具であることに気付く。

道具とは、もともと仏教上の用語であって、修道の具のことであったといわれる。道を修め、悟りを開くために用いられるもの、それが道具であった。とするならば、私に関わる一切は、私がこの世に生きて自分の魂を光り輝かせる修道のための道具として、神さまが私に備え与えて下さったものであることに気付くのである。

先のイエスさまの示しはそのことをよく語っている。鳥も花も草も人の魂を神に導くための修道の具であることを、それと気付くことのない私たちに示して下さったのである。

そのような意味で、私たちに関わる一切の事柄は有り難い事なのである。それが秘めている修道の具としての価値を見出す智慧ある者にとつては、すべてが有り難く、尊い事となる。そのことを使徒パウロはつぎのように言った。

× ×
神の造られたものは、みな良いものであって、感謝して受けるなら、なにひとつ捨てるものはない。

× ×
— 第一テモテ書四章四節 —

× ×
このように思いめぐらしてくるとき、私たちがこの世に生きている意味がハッキリと領解できるようになる。それは、この世は魂の修道の場であり、神の祝福の世界へと進むために備えるための時であるということだ。そのことに気付く神の智慧を得ないままにこの世を生きるならばかえって、この世を生きたことがその者にとって仇^{あだ}となる。



べしるちるみ

神は愛する者を戒められる — 聖書 —

心で信じ、口で言い表す

聖書の言葉は深い味わいを秘めている。嗜みしめても嗜みしめても、その味は消えることなく、かえって、嗜みしめるほどに味わいはいよいよ増し加わり、その深さは尽きることはない。

人は、心で信じて義とされ、
口で言い表して救われる。

ロマ書 十章十節

ここに紹介した聖書の言葉もその一つである。私はいつもこれを嗜みしめ、そこに秘められた味わいを求道悦楽している。

× ×
なにごとにおいても、ものの味というものは、そのものの内に隠されている。したがって、味とはそのものが持つ秘密だといえる。そうして、その秘密の扉を開ける鍵は一つだけである。それは、自分もつ好き嫌いの感情や感覚から自分を解放することである。

自分の好き嫌いの感情や感覚に固執したままで、どれほどのものを味わっても、そのものの味を知ることは出来ない。私たちがそのものに対して素直になり謙虚になって、そのものに随って行こうとするとき、そのものの味がわたしたちの内に生きてくる。即ち、それを深く知ることができるようになる。

しかし、わたしたちは、いつも自分の好き嫌いの感情と感

覚とで人にも物にも関わっている。それ故に、人も物も深く味わうことなく、自分勝手な思いで批判をし批評をしてすべてを終える。

× ×
味わうとは食物だけのことではない。すべての人や物との関わりについていえることである。だから、先に、思いめぐらしたとおり、深く味わう思いがなければ私たちは、自分の人生そのものを空しく過ごすことになる。

そこで、もう少し、このことについて考えてみよう。深くそのものの味を味わうためには、自分の好き嫌いの感情や感覚に固執することなく、そのものの味に自分を素直に随わせるとき、そのものの味が私たちの内に生きてくると言ったが、それは、そのものと自分が一体になることなのである。それが、深く知ることであろう。だが、それだけではない。それは、愛するということでもあるのだ。何故なら、愛するとは、自分の思いを捨てて相手の思いと一つになること、相手の命を自分に共有することだからだ。

さらに、それは、信ずるということでもある。何故なら、信ずるとは、自分の思いも、力もついやすことなく、自分というものを忘れて、そのものの中へ自分を投げ込み、そのものの命に生かされることだからである。

× ×
ここで、先にかかげた聖書の言葉に思いを向け、繰り返し声を出してゆっくりと味わってみよう。

人は、心で信じて義とされ
口で言い表して救われる。

何と明快な言葉だろうか。何と味わい深い言葉であることか。「そんなのだ、そんなのだ」と思う。否、「それであったのか」と気付く。

これは使徒パウロが語った言葉である。彼はイエスさまを見ている。

彼はイエスさまの誕生、行い、死、復活を見ている。そして、イエスさまを深く味わっており、イエスが、示され、お与えくださった大なる命の喜びを自分のものとして知ること、愛すること、さらにその命に生かされるための、ただ一つの術を語っている。

彼は言う。「心で信じて義とされ、口で言い表して救われる」と。これこそ、人が、神に義とされ、救われるために心得ておかなければならない方法だったのである。

「信じる」ことと「口で言い表す」ことが、別々にあるのではない。信じることによってこそ、本当に口で言い表すことができる。また、口に言い表すことが信じることを深くする。どちらが欠けても、その真实性は弱くなる。

では、信じることと口に出して言い表すこととはどのような関係にあるのだろうか。この二つは別々にあるのではないと先にいったが、それはほば次のとおりである。

わたしたちが、なにかを知ろうとする場合、知ろうとするものに不信をもっていては、いつまでたってもそれを知ることはできない。よく知るためにはそのものを信じるのがどうしても必要なのである。不信はすべてを破壊してしまう。難しく言えば、不信はすべての認識を歪めてしまうのである。その人に対して不信を持っていては、その人を正しく認識することはできない。そのことに不信を抱いていればそのことを正しく認識することは出来ない。

その人を信じてこそ、その人を正しく認識できる。そのことを信じてこそ、そのことを正しく認識出来る。正しい認識の絶対条件は「信ずる」ことである。

だからこそ「人は、心で信じて義とされる」のである。にも関わらず人は信ずることをしないで、正しく知ろうとする。「聖書は読むのは好きだが、信じない」と声高に強調する人がいるが、信ずることをせずして、どうして聖書の言葉を正しく受けとめることができようか。このような愚かな教養人がこの世には溢れている。神の愛も思ひも、不信を抱く者の元には永遠にとどくことはないだろう。

ここで、すこし注意深く見ておきたいことがある。それは「心で信じる」ということである。無分別に信じることは「心で信じる」ことではない。世間でいう「鰻の頭も信心から」といわれるような「信じる」ではない。思慮なく軽々しくホイホイと無自覚に信じることではない。「心で信じる」とは、真実なるものに対する深い魂の智慧の共鳴としての行為である。それほど感動的で偉大なる行為が「心で信じる」ということなのである。

心で信じるということは、人間が全宇宙に対する「基底」である。人間と総ての存在とを結ぶ空間であるともいえる。信じるのがなければどのような事も造りだすことはできない。信じる事がなければ、一切は滅ぶ。

まことに信じることはすべての初めである。

心で深く信じるとき、その信の心と思いは口を通し、言葉となって溢れ出てくる。

心で信じているとは、あたかも信の心を自分の内にかもして、じょじょ

に醗酵する作業に似ている。未だそれは外には現れない。だが、内にあるのは醗酵の作業がなされ、新しい命の営みが創造的に躍動しているのだ。やがて時が来て熟成する。それが「口で言い表す」ということである。これこそ、厳密な意味での「告白」なのである。

「口で言い表す」とは、なんと感動的な行為であるうか。

×

×

「心で信じる」ことが深く豊かであればあるほど、その確信は強くなくなり、その「信」は熟成される。そして、遂に、確信は言葉となって現成してくる。それは、止み難きこととして溢れるごとくに自然に現成して来る。固い大地を割って樹木の芽が光り輝く天に向かって己の全身を投げ出すように。「口で言い表す」とは、なんと美しく、聖なる業であることだろうか。

×

×

「信」を「口で言い表す」ことによってそれは一層に深められ、確信はより強くされる。

口で言い表すとは、思うところを言葉とすることである。言葉は響きである。思いが響きとなって宇宙に拡散する。それは天にも届く。

自分の言葉を最もよく聞く者は自分自身なのである。人はこの事実にあまり気付くことがない。

人は言葉によって自分自身を造形していくのだが、その言葉のなかで最も自分に影響をあたえる言葉は、自分自身の言葉なのである。

口で言い表された言葉の響きは、再び語った者の内に帰って来る。だが、帰って来た言葉は、出て来たところより、より深いところへ届き、語った者に決定的な影響を与える。ときとして、それは、その者を決断させ、偉大なる行動へと導くエネルギーとなる。

私たちは、掛け声と同時に行動を起こすことが多い。自分の言葉は自

分に行動を呼び起こす。「えい!!」「や!!」「それ!!」「がんばれ!!」など上げれば尽きない。

さらに、抑えて来た感情が、自分の言葉と同時に耐えきれなくなつて爆発し、一挙に行動を起こしてしまうこともある。

「口で言い表す」ことは、人に、より強い確信を与え、行動へと導く。

×

×

それだけではない。「口で言い表す」とは、「心に信じる」ことを言葉で分別することでもある。人は、自分の思いを言葉に出来たとき喜びと安心とを覚える。言葉とは思いを分別する行為なのである。従って、心に思うことを言葉で分別するとき、その思いは確信に満ち溢れる。

心に信じることを、口で言い表すこととは一体のものだったのであるだからこそ、使徒パウロは「人は、心で信じて義とされ、口で言い表して救われる」と示したのである。

×

×

神に義とされるものに信をおき、救われるに相応しい言葉を口にした

と思う。

やがて消えて無くなるものに信をおくことをするまい。軽薄な言葉を無節操に口にするまい。とは言え、とりすまして生きるのではない。己の人生を光り輝かそうと願われる神を仰ぎ、その願いの中で思いのたけを発揮して生きたいと願う。聖書は、そのような人生を人に与えてくれる。



べしるちるみ

—イエス— 私について来なさい。恐れることはない。

人生が変る I

人生には不思議が満ちている。人が人と出会うことも不思議の一つである。

人と人との出会いは、その人が求めたから成るものではない。さりとて、じっと待っていて成るものでもない。人の思いを超えた時が来て、それは成る。

会いたい会いたいと思う人がいる。だが、何故か会えない。その時が来ないからである。その時がくれば、会いたくなくても会わせられる。まことに不思議である。

人と人との出合いを語る美しい言葉がある。「邂逅」という言葉だ。わたしはこの言葉の響きが好きだ。

「邂逅」を字典に探してみると次のようであった。「邂逅ハ悦ブ貌」。

期せずして相会うとは、いうなれば思いもかけない時に出会うという不思議のことであろう。また、悦ぶ貌とは、そのことに素直に服して楽しんでゐる姿のことである。

「邂逅」という文字がもつ落ち着きと気品、その響きの心地良さが、生じて来る理由は、この文字が秘めている内容からだだよって来るのかもしれない。

人は一人ではなれない。「人間」とは「人の間」と書

くがその文字が示すとおり、人は人と人との交わり、出会い、邂逅によってこそ人へと育って行く。

人は生まれて母と出会い、父と出会い、兄弟と出会い、友と出会い、人生の導師と出会い、伴侶と出会い、自分の子供と出会い、さまざまな出来事と出会う。そこに喜びあり悲しみがある。そこに誇りがあり苦しみがある。誰も、そこから逃げることは出来ない。そこに留まって生きるときにだけ人は人へと育って行く。

さまざまな出来事に私たちは出会うが、それが苦なのではない。さまざまなことに出会うことが人生なのであってそれ以外に人生はない。それは、晴れの日があり曇りの日があり、そして、雨の日があり嵐の時があるのが自然の営みであってそれ以外に自然の営みは無いのと同じである。

太陽があり、光りを私たちの元に降り注いでくれるという出来事は、私たちの計らいを超えた事である。地球が太陽の周りを公転しつつ自転し、四季をもたらし昼とよるとを備えていることは、私たちの策を超えた出来事なのである。そのこと自体は苦しみでも無く、悲しみでもなく、喜びでもない。それらはすでに在るものであり、そこに生きているのが私たちなのである。そこでのみ人は人なのであり、人として育って行くのである。

問題は、それらの出来事をどのように私たちが受けるかということである。それを苦しみとして受け取るなら、その人は苦しむことに

なる。それを喜びとして受け取るなら、その人は喜ぶことになる。

苦しみということが在るのではない。喜びということが在るのではない。それを喜びにするのも、苦しみにするのもそれを受け取る私たちの思いと智慧によるのである。

「丸い卵も切りようで四角、ものも言いようで角が立つ」と諺にあるが、その人の関わり方によって丸いものにも角が出来てしまう。また、「人は自分の愚かさによって道につまずき、かえって心のうちに神をうつらむ」と聖書は言う。(旧約聖書 箴言一九章三節)

私たちは自分自身を変えようとはしないで、相手を変え、周囲を変え、ことにのみ熱心になる。そして、相手が変わらなず、周囲が変わらなければ文句をいう。あげくのはてには、「わたしは、何と不幸な星のもとに生まれたのだろうか」と天を恨み、神を呪う。

自分が素直にならず、謙虚になることを忘れて、相手や周囲を自分に従わせることによって自分を幸いにしようとす。聖書はそのような者を「智慧なき者」と言う。

では、智慧のある者とはどのような人か。聖書は次のように言う。

まず第一に清く(神に出会うために十分に清くなつた智慧)、第二に平和(人を人へ、人を神へ正しく近づける智慧)、第三に寛容(規則や法令よりも偉大なるものがこの世にあるということを知っている智慧)第四に従順(真実―神―に、自分の我をはらずに素直に従う智慧)、第五に深い憐れみとそれを行う智慧、第六に神の真実にたいする確信を持ち偏り見ない智慧、第七に偽りがない(表面だけを真実のように見せかけるようなことはいない智慧)のことである。(ヤコブ三章一七節)

ここでもう一度、先の「邂逅」ということに戻ろう。「邂逅トハ期セ

ズシテ相会ウコト」であると共に「邂逅ハ悦ブ貌」であると学んだが、特に後の意味するところ、即ち、出会った不思議に素直に服して悦ぶことということは、邂逅の祝福をそのまま表現したものだと言える。そして、これこそ「智慧のある者」の貌なのである。

人生のさまざまな出会いを、智慧なきために、そこに隠された神さまの愛に満ちたご計画を知ることが出来ずに、空しく見過ごしてしまう人がいる。しかし、智慧ある人は、その智慧の働きの故に、どのような者や出来事に会っても、そこに神の見えない計画を知り、感謝と喜びに変えてしまう。そして、自分自身の魂を豊かに成長させる。これが、出会った不思議に素直に服して悦ぶと言うことである。

本当の智慧は、自分の利益だけを得るための「策」としての知恵ではない。策としての知恵は、人の世に満ち溢れている。世間はこのような知恵を求めることに血眼になり狂気となっている。嘘、偽り、汚れ、盗み、憎しみ、争い、ついには、人を殺すこともはばからない。

そのような人は求めても求めても、自分を満足させることは出来ない。にもかかわらず、なおそれでも足りないかのように思い、屋上にお屋上を積み重ねることで、遂には自分を満たすことが出来ると信じ、止まることを知らない。まさに、餓鬼地獄にある者の姿である。

本当の智慧の行き着くところは、徹底した「へりくだり」である。一切の自分中心的、利己的な策としての知恵を捨てることである。そして自分の計らい、知恵を超えて自分に働きかけてくる不思議の力(神の働き)に委ね、そこで安心して悦んでいる貌こそ智慧ある者なのである。

私たちの魂を安心させ満足させるものは、おおくの知識ではない。策としての知恵をもつことでもない。「へりくだる」心と思いとをもって

なにごとにも素直に関わることによって、魂の安心と満足を自分のものとする事が出来るのである。そのとき、自分に関わる出来事がその内に秘めていた本当の姿が理解出来るようになって来る。そして、どのような出来事も感謝と悦びとをもって頂くことができるようになる。

イエスはサマリヤの町に來られた。そこにはヤコブの井戸があった。

旅に疲れたイエスはそのまま井戸の側に座っておられた。正午ごろのことである。サマリヤの女が水をくみに來た。イエスは「水を飲ませてください」と言われた。弟子たちはたべものを買うために町に行っていた。するとサマリヤの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリヤの女のわたしにどうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリヤ人と交際をしていなかったからである。イエスは答えて言われた。

「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、「水を飲ませてください」と言ったのがだれであるかを知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」女は言った。「主よ、あなたはくむものをお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。」イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。」女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに來なくてもいいように、その水をください。」

ヨハネ福音書四章六節―一五節―

これは、イエスとサマリヤの女との邂逅の物語である。女にとって、イエスとの出会いは思いもかけない出来事であった。

彼女には夫も子供もいなかった。世間からは白い目で見られ、とかく

噂の種になるような生き方をしていた。しかし、彼女は自分から好んでそのような生き方をしていたのではない。自分の願いに反してそのような状況のもとで生きねばならない自分になっていたのだ。

彼女は多くの悩みや苦しみを背負って生きていた。否、彼女が生きて行くためにはどうしても、背負わねばならない苦しみ悲しみであった。長い苦しみと悲しみは彼女を押し潰して、その心と身体とを汚し、思いを歪めてしまっていた。

おそらく、彼女は悲しみのなかで何度も何度も神さまに呼びかけ祈ったにちがいない。しかし、現実はずますます厳しい状況に彼女をおいやった。絶望と諦めが彼女の心をかたくなにしてみました。世間は彼女の心も思いも知らないし、また知ろうともしないで、ただ、軽蔑し嘲笑するのみである。

しかし、人はどうであれ、神はすべてを知り給う。人が心の内に思い考えることのすべてを知っておられる。だからこそ、今、イエスさまはこの不幸な女の前に立ちたまうたのである。しかし、女は神さまの計画に気付かない。人の知恵はこのような神の愛を知る心を持っていない。人の知恵はひたすらこの世にだけ向く。

イエスの言葉と眼差しは、彼女の思いの底にまで届き、優しく響いた。それは、彼女の内にまどろんでいた魂を、神の方に目覚めさせたのである。その時、自分が何を求めていたのかということを知った。と同時に自分の知恵と感覚だけをたよりにして、この世のみを見、そこで満足を得ようとして悩み悲しんでいた自分の愚かさにも気付いたのである。

おそらく、「これこそ、私が久しく求めていたものだった」という思いとともに彼女の胸は熱くなり、喜びと平安と希望と力が全身に漲るのを確かに感じたに違いない。そのとき、彼女は限りなく謙虚になり、

へりくだる者となったことは、先の聖書の物語につづく下りを読む時ハ
ツキリと分かる。是非一読していただきたい。

彼女は、厳密な意味において、イエスさまと邂逅したのである。

自分の知識を広め、感覚を楽しませるようなものに、私たちがどれほ
ど多く出会っても、私たちの魂は豊かにならない。そして満たされるこ
ともない。だから、イエスさまは、人々が毎日繰り返し飲む水を指して
言われた。「この水を飲むものはだれでもまた渇く」と。

これは本当のことである。水は生きて行くため毎日に必要なものであ
る。好むと好まざるとに関わらず、繰り返し摂取しなければならぬ。
正に、現実とはそのような反復の作業である。そして、その繰り返し
出来なくなるとき、私たちは死ぬ。

しかし、イエスは女に言われた。「わたしが与える水を飲む者は決して
渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至
る水がわき出る」と。

空しい繰り返しからの生き方から抜け出す道をイエスさまは示された。

自分の内なる思いが変われば、外なるすべても変わる。自分の内なる
思いが明るくなれば、外なるすべてが明るくなる。

自分の内に智慧を頂くと、この世のすべての事柄に秘められた神の
不思議の御愛が理解でき、喜び感謝することができる者となる。自分の
内に智慧を頂くと、空しい繰り返しからの人生から抜け出し、栄光に輝く
永遠の命の世界に生きる自分を知る。自分の内に智慧を頂くと、この
世にのみ注がれていた眼差がこの世を突き抜けて神の世界に向けられる
ようになる。

そのような人は、以前のその人ではなくなる。神につながる内なる魂

が躍動をはじめめる。そして、喜びと希望、力と平安、慰めと忍耐、明る
さと輝き、讚美と祈りとが泉の如くに自分の内から湧きだす。

以前の自分とは違った自分となり、人生が一変する。

イエスさまと邂逅したかの女は、まったく変えられた。それは正に、
死せる者が新しい命を得て蘇った者の姿である。だれも、彼女の喜び、
希望、安らぎを奪い取ることは出来ない。

そのとき、彼女は、それまでは見えなかった神さまの不思議な愛の御
手を深い感謝とともに悟ることが出来た。それは、この私に命の水を与
え救うために、イエスが遠くガリラヤの地から、このスカルの井戸辺ま
でその足を運び給うたということ。

私たちが、自分の思いを神に向けるとき、イエスさまがその処で何時
も命の水を与えようとしてお待ちくださっていることを、彼女は、今も
聖書の物語を通して私たちに示し続けている。



べしるちるみ

あなたがたの身体は、^{せいれい}聖霊が宿っている
神の宮である。 —聖書—

わたしの体は神の宮

人生というものをよくよく考えてみると、それは「私」という自分を探し求める旅ではないかと思う。

その昔、ギリシャの哲人が、日中に明かりを灯し 何かを探すようにして道を歩いていた。それを見た友人が「一体何を探しているのだ」と尋ねると、その哲人が答えた、「人間を探しているのだ」と。

彼は、ひよっとすると、「私」という自分を探していたのかもしれない。

私たちは日頃、「私」という自分については、既に分り切ったことと思ひ込み、その自分を中心にして周囲のものや事柄に関わっている。つまり、自分の目は何時も自分の外の方ばかりに向いていて、「あれがどうした、これがどうした、あの人がどうした、こうした」などと、いろいろ思ひを働かせているが、決して、自分の方にその思ひを向けようとはしない。

しかし、わたしたちは、自分が思っているほど確かに「私」というものを知っていないのである。

「私」「私」と人は言うが、一体その「私」はどこにいるのか、と問われると困ってしまう。

例えば、私の手とか、私の足とか言うが、その当の「私の」という「私」はどこにいるのだろうか。私の手は「私のもの」であって「私」ではない。私の足は「私のもの」であるが私ではない。このことをもうすこし具体的に考えてみよう。例

話としてはあまり良いとは思わないのだが、とにかく、私の手と腕と足を切り捨てる。次に私の胴体を切り捨てる。すると後には頭と首とが残るが、それらをも捨ててしまう。さあ、これで、私の身体はすべて捨ててしまったことになるが捨てられたのは「私の手、私の足……」つまり「私の身体」だけなのである。その時「私」は何処にいるのだろうか。

これは理屈ではない。事実にして述べているのだ。それにしても、「私」は手だったのか。「私」は足だったのか。「私」とは身体だったのだろうか。つまり、「私」とは「肉」や「物」だったのだろうか。

肉体は「私のもの」にしかすぎない。その意味で、私とは肉体を超えているものである。肉体に於いて私は現れても私

は肉体ではない。肉体に於いて現れない「私」があるのだ。肉体は私のものである限りにおいて、私の肉体と私とは相即不離である。しかし、私は肉体ではないし、肉体が私でもない。私と私の肉体とを同一化してしまうと、私が私の肉体そのものであるかのように錯覚してしまう。そのとき、その人は肉体と私とを同一化してしまい、その自分に振り回されるようになる。このことが、私と私の肉体とを同一化することによって生じる最も大きい私に対する害悪だと言える。このことについて、もうすこし分かり易く言おう。

私たちはこの社会でそれぞれの顔ベシヤを持っている。たとえば「警察官」「大工」「教師」「社長」……など。しかし、それは社会でのその人の役割であってその人そのものではない。つまり、「警察官」であるといふことはその人の役割であってその人ではない。先の言い方で表現すれば私は警察官という役割を持っていても、「私」は警察官ではない。ところが「私」は警察官だと思ひ込んでしまう。このように私の役割と自己同一化してしまふことは、私を役割で限定してしまふことになり、それは本当の私を見失うことになる。

次のような話を聞いたことがある。彼はパトカーに乗っている警察官である。彼は自分とても自動車の運転が上手だと思ひ込んでいた。ところが、休日の非番の時に初歩的な運転ミスをして事故を起こしてしまつた。そのときに、彼は初めて自分の運転技術が自分が思ひ込んでいたほど上手ではないということに気付いた。それは、パトカーの警官として運転して道路を走っているときには、彼の車を他の車が避けて走っていたので、あたかも自分の運転技術が上手であるかのように思へたに過ぎなかつたのであるということを知つたからである。

いつでも、どこでも「先生づら」をしている「先生」がいる。彼は、ある特定の場所で「先生」という役割をもつて働いているにしか過ぎないのに、その特定の場所を離れても尚なほ「先生」であることは、明らかに彼の思ひ違ひだといえる。彼ははつきりと「私は先生という役割をもっているが、先生というものが私ではない」と自分に言い聞かせなければならぬ。

自分の役割と自分を同一化し続けて生きている人がある。そのよう

な人の人生は哀あはれである。自分の人生のかつての一時にそうであつた栄光ある自分の役割に、いつまでもしがみつき、それとの自己同一化に生きることをただ一つの生き甲斐がひにしているような人は、最後には悲しみと哀あはれとの空しさの絶望を味わうことになる。

自分の感情や気分や、さらには自分の知能や思考なども自分と同一化することがある。

悲しんでいる自分か自分だと思ひ込む。喜んでいる自分が自分だと思ひ込む。怒っている自分が自分だと思ひ込む。これすべて、その感情や気分と自己同一化しているのだ。

そのようなとき、私たちは次のように自分に言い聞かすとよい。

「私は感情を持っている。しかし、私は感情ではない」「私は気分を持っている。しかし、私は気分ではない」と。

私たちの感情はしばしば私にとって素晴らしい働きをする。しかし、感情は私のものであつて、決して「私」ではない。私の感情と「私」とを自己同一化してしまうと、感情を最も大切なものと思ひ込むようになり、すべてを感情で関わりとうとする、所謂、感情至上主義におちいる。

さらに、知能や思考を自分と同一化する者もある。どのようなことも知能や思考の努力で理解し判断しようとする。このような人には感情や気分が理解したり判断したりすることはまったく馬鹿らしいことだと思ひ込んでいられる。彼は、自分の知性の働きと自分を同一化してしまつていられる。そのような者は自分に対して次のように語るとよい。

「私は知性を持っている。しかし、私は知性でない」と。

私は肉体を持っている。しかし私は肉体ではない。

私は肉体以上の者である。

私は感情を持っている。しかし私は感情ではない。
私は感情以上の者である。
私は知性を持っている。しかし私は知性ではない。
私は知性以上の者である。

「私」とはいったいどこに在り、何なのだろうか。それに気付くためにもう少し考えてみよう。

わたしは日本人であり、松下昌義という姓名を持つ五十八才の男である。さらに、夫であり父親でもある。牧師とも呼ばれている。ところがそのような自分を、あたかも他人を眺めるように冷静に「私」は見ることが出来る。その「私」は松下昌義以上のものであり、年令も性別も超えたものである。さらに、その「私」は夫とか父親とか牧師とかには全く関係がないものである。「私」とはそういうものなのである。

「私」についてもう一步踏み込んでみるなら、その「私」は死んで行くわたしをも、あたかも他人が死んで行く様子を眺めるよう見つけられることができる。「私」なのである。そこでは「私」は死というものにも関係なく、死をも超えているのである。

加えて、もう一步踏み込んで「私」を語るならば、「私」は地球の誕生と滅亡、宇宙の誕生と滅亡をも、あたかも風船玉が生じ、やがて割れて消えてしまう出来事を眺めるように見ているものなのである。

実に、このような「私」が「私」の本来の姿なのであり、この「私」に目覚めるとき、その人は、怒りや喜び悲しみの感情、知識や理屈の知性、さらに肉体の感覚などに支配されず、支配する自分になり、深い落ち着きを自分のものとする事が出来るものとなる。それはとりもなおさず、人間存在の核心に気付いたのである。

聖書は、人を「外なる人」と「内なる人」とに分別している。そして

使徒パウロは「外なる人は日々滅ぶれども、内なる人は日々新たに」と言うが、この「内なる人」こそ「私」なのである。「内なる人」を「私」とよび「外なる人」を「わたし」というならば、「私」は「わたし」をはるかに超えている。そして「わたし」ではなく「私」が自分の主人であることに目覚めるとき、人は本当の自由人となる。なぜならばその人は、自分を外なる人ではなく、内なる人の命に与かって生きるからである。そのとき、その人は次のように言うことが出来る。「もはやわたしは外なる人によって生きているのではなく、内なる人によって生きている」と。イエスさまの弟子であった使徒パウロは、正にイエスさまによって、そのような自分を生きる者とされたのである。だから彼は生きている只今の自分について、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられる」ということが出来たのである。

使徒パウロは、「内なる人」に与かって生きることを、「キリストに結ばれた者」と言い、また、「キリストを着ている者」とも「キリストの命に与かっている者」とも言っている。そして、その命に生かされ、その命に立つ時、「そこではもはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由の身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つです。」と言った。このパウロの言葉を聖書で是非読んでいただきたい。その箇所は、新約聖書のガラテヤ人への手紙二章二十節以下と三章二十六節以下である。

もうすこし使徒パウロの生きざまから学ぶことにしよう。

彼も以前は自分の知恵や感情、自分の意志の力を「私」としての自分だと思ひ込み、それをむしる誇りとして生きて来た。そのような生き方

を「肉を頼みとして生きる」と言っている。それは、自分の知恵や感情意志などと自己同一に生きることである。それらを自分の主人として、それに振り回され、それに仕え、それと自分を同一視してしまうことである。その時は、その感情が喜ばば喜び、悲しめば悲しみ、怒り出せば怒り、知性が理屈に合わぬと疑えば疑い、批判すれば批判をし、意志が不安を抱けば不安になり、強がりになれば強がり、とにかくそれらが動くままに自分を動かしていた。そのように生きることが自分という私が生きることだと思ひ込んでいた。だが、そのような生き方は本当の自分、真実の私の生き方ではなかったのである。いうならば、それは虚構の私、幻想の自分、嘘の自分を、本当の私、真実の自分だと思ひ違ひをしていたのである。その事実をイエス・キリストに出会うことによつて示された。そればかりではなく、偉大な命に与かつている自分に開眼させられたのである。そのことを彼は「私」を「宝」と言い、「わたし」を「土の器」という比喩を用いてコリント第二の手紙四章七節以下、次のように告白する。

「このように宝を上の器に納めています。この並外なれた偉大な力が神のものであり、わたしたちは四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ばされぬ。……あなたがたの内には命が働いている」

彼は、自分の内に働いている命が「わたし」を遙かに超えている偉大な永遠なるものであることを知ったのである。そして、その偉大な命に自分が生きている生きる姿を具体的に次のように同じコリント人への手紙の十章三節で言ひ表している。

「私たちは肉において歩んでいますが、肉に従つて戦うのではありません「せん」と。

彼がここで言う意味は、先の表現を用いて言うならば、「たしかに、わたしはこの世に我が身を背負つて生きています。わたしのものである

知恵、感情、肉体などを用いています。しかし、私はわたしの知恵以上のもの、私はわたしの感情以上のもの、私はわたしの肉体以上のものがあることを知っていますので、わたしの外なる人であるその肉体や感情知恵などに頼り、それを用いて自分の生活をおし進めて行こうなどとは夢にも考えることは出来ません。なぜなら、わたしの本当の主人はわたしの内なる人、即ち死も生も、初めも終わりもない永遠の命そのもの、光りそのもの、全能と栄光とに満ち満ちている「私」そのものだからです。その「私」をわたしはキリスト・イエスの生涯、特に復活のキリストの命に与かることによつて、はっきりと自分のものとさせていたからです。わたしは今、「私」がどのような者であるかということとを明確に知っています。わたしは土の器のような者ですが、わたしを生かしているわたしの内なる人は神そのものでいらっしやいます。わたしはその内なる人の目と知恵と力と愛とを通して、わたしに関わる一切を見て判断して行動し対処して行きます。その生き方は永遠の栄光の希望と喜びとに通じているのです。」

わたしの内に偉大な「私」が眠っている。それは、今、わたしたちが「わたしだ」と思っているものをはるかに超え神に通じる偉大な「私」である。その「私」の目と耳と智慧とですべてを見直してみよう。その時、あなたが見、あなたが感じ、あなたが聞き、あなたが理解するこの世界は、今までとはまったく違つた世界となる。あなたの生き方が変わるにちがいない。

「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿つてくださる神の宮である」

べしるちみ

—聖書—
すべてのことには時がある

神の愛だけが「私」を救う

どのような人でも迷う。どのような人でも怒る。どのような人でも悲しみ喜び邪念をいだく。

×
正しい者はいない。一人もいない。悟る者もなく、

神を探し求める者もない。

×
皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。

善を行う者はいない。

ただの一人もない。

×
彼らのどのは開いた墓のようであり、

彼らは舌で人を欺き、

その唇には蝮の毒がある。

×
口は、呪いと苦みで満ち、

足は血を流すのに速く、

その道には破壊と悲惨とがある。

×
彼らは平和の道を知らない。

彼らの目には神への畏れがない。

—聖書—

×
「罪人である私をお救し下さい。」と祈る謙虚な人を見て
×
イエスは言われた、「あの人の祈りは、神さまに受け入れら

れた」と。

その「罪」という漢字は「四」つの「非」を表している
と私に教えて下さった方がいる。

「非」とは「わるい」とか「あやまり」とか「欠点」とい
うこと、そして「四つ」の「非」は、「我痴」と「我見」、

「我慢」「我愛」のことである。第一の「我痴」とは、自分
がどのような者であるかということを知らないでいることを

指し、第二の「我見」とは、私の考えはこうなのだ、自分
の意見を固守して他人の言うことに謙虚に耳を傾けようと

しないことをいう。また、第三の「我慢」とは、傲慢な心をも
って他人を見下すことであり、最後の「我愛」とは、自分に

執着して自分のためだけにすべてのことをすることである。

このように「罪」を考えると、誰もが、自分の身に覚えの
有ることはかりであって、「自分とは「罪人」なのだなあ」

×
と思う。たしかに、その意味では、私たちのだれもがまちが
いなく「罪人」である。

×
聖書に於ける「罪」という言葉は、投げ槍において「的を
射はず」「事を為損ずる」などの意味に用いられたそうだ

が、それが、「人の行いの不正なる性格」を意味するものと
してもちいられるようになったのが「罪」ということだと

×
われている。

つまり、私たちの欠点や弱さ、不完全なことが「罪」なの
ではなく、真実なる方、つまり神さまに対して無関心に生き
る、そのことが、人として、「的を射はず」ような生き方であ
り、それが「罪」なのであると、聖書は示している。

どのような人も、すべて神さまの支えの下に生かされている。「私は
そうではない」と叫んでも、その人は、しよせんは、神さまの支えの上
で叫んでいるにしかすぎない者なのであって、結局、神さまの手の中な
のである。

神さまの手の中に生きているということは、とりもなおさず、神さま
に生かされているということである。この「神に生かされている」とい
う事実が、私たちにとって基本的な事実なのである。別な言い方をすれ
ば、「私」の身体の働き、知能の働き、感情の働き、意志の働きなどの
すべてが神さまの支えのもとにあるということにはかならない。

このような事実には本當に気付くなら、その人は、その有り難さにただ
感謝して手を合わさずにはおれなくなる。にもかかわらず、感謝するど
ころか、愚かな理屈を振り回して、自分が一人で生きている、自分ほど
偉い者はないと思ひ込んで感謝も祈りもなく傲慢に生きているのがわた
したちである。つまり、神からはずれて生きているのである。そのよう
な生き方を「醜態を射はずした」在り方、即ち「罪」と聖書は言うのであ
る。

このように、聖書が言う「罪」とは、理屈で定義するようなことでは
なく、どこまでも「わたしの今の生き方の姿」として生々しく現れてい
ることなのである。

それにしても、私たちは今、自分の思いの一番深い処に、「私は神さ
まに生かされているのだ」という感謝と安心との思いがあるだろうか。

「神は存在するか、しないか」とか、「宗教の教義云々」などというこ
とに何時までもこだわり続ける必要はない。暇な方は一生そのような遊
びをしていたらよいと思うのだが、本當に生きようとする者にとっては

自分が生きている支えを知ることとは、どのようなことを知る以上
に最も大切なことなのである。

身体にとって食物は最も大切である。それは身体の支え手だからだ。
今日の経済の仕組みの中で生きるものにとって、お金は最も大切なもの
の一つである。それは、お金が生活の支え手だからだ。それと同じよう
に私の存在ということにおいて、最も大切なことは、私の存在の支え手
である神を知って生きていることである。なぜならば、人間は人間の計らい
だけでは生きられず、次の瞬間に何が起る事すら分からない者だから
である。

私たちは愚かで弱い、だから迷う。すぐに怒る。邪念をいだき感覚の
欲に振り回される。しかし、自分の支え手を知っている者は、その中に
あっても遂に救われる。だが、自分の支え手を知らぬ者は、救われるこ
となく、暗黒の中へ埋没して、再び立ち上がることが出来ない。

紀元前一〇〇〇年の昔、ユダとイスラエルを統一国家としてつくりあ
げたダビデ王は、その信仰的人格において名君と仰がれた。彼は、ヘブ
ルの音楽と詩、それは神を讚美するものであったが、数々の優れたもの
を残している。そのダビデ王に、次のような出来事が起こった。

「年が改まり、王たちが出陣する時期になった。ダビデはヨアブとそ
の指揮下において自分の家臣、そしてイスラエルの全軍を送り出した。
彼らはアンモン人を滅ぼし、ラバを包圍した。しかし、ダビデ自身はエ
ルサレムにとどまっていた。

ある日の夕暮れに、ダビデは午睡から起きて、王宮の屋上を散歩して
いた。彼は屋上から、一人の女が水を浴びているのを目に留めた。女は
大層美しかった。ダビデは人をやって女のことを尋ねさせた。それはヘ
ト人ウリヤの妻だということであった。ダビデは使いの者を使って彼女

を召し入れ、彼女が彼のもとに来ると、床をともした。彼女は家に帰ったが、子を宿したので、ダビデに使いを送り、「子を宿しました」と知らせた」

この知らせを受けたダビデ王は、早速、戦場にいるウリヤを妻のもとに帰らせ、床を共にさせて、女の身に起こっている子どもをウリヤの子どもにしようとして企てたのである。しかし、戦場から帰って来たウリヤは、「部下たちが激戦地で生死をかけて戦っているのに、私一人がどうして妻のところで休んでいられますようか」とダビデ王に言って、妻のもとには行かなかった。

自分の企てが失敗したことを知ったダビデ王は、戦場の司令官に宛てた手紙をウリヤに持って帰らせたが、その手紙には「ウリヤを激しい闘いの最前線に出し、彼を残して退却し、戦死させよ」と書かれてあった。こうして、ウリヤは遂に戦死し、再び帰らぬ人となった。

「ウリヤの妻は夫ウリヤが死んだと聞くと、夫のために嘆いた。喪が明けると、ダビデは人を作って彼女を王宮に引き取り、妻にした。彼女は男の子を産んだ。しかし、ダビデのしたことは神の御心に適わなかった。」

— 聖書サムエル記下十一章 —

誰もダビデを憎むことは出来ない。どの人の心の内にもダビデと同じ心がかうまわっている。その人の表面がどうであれ、その内面にはどうすることも出来ない暗くおどろおどろしたものが潜んでいる。人の罪は、一つ一つの行いが正しいとか悪いとか言うことではなく、「わたし」という存在そのものの不正なる性格それ事態が、真実なる神の願ひ心から離れ、裏切つて生きていく。そのような人の在り方を聖書は「人間の罪」というのである。私たちはダビデ王に於いて、また自分自身内にその「罪」をはっきりと見るのである。

どの人も、ぬぐうても、ぬぐうても消え去ることのない罪を背負って生きていく。

使徒パウロは、その罪を正直に自分自身の姿に見て、「わたしはなんという惨めな人間なのだろう。だが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。」と叫んだ。

「ダビデのしたことは神の御心に適わなかった」のであって、人の心に適わなかったのではない。人は騙せる。人はその表面しか見えない。しかし、神は決して欺くことは出来ない。神はその内面を見られる。だが、私たちは、人を欺き騙すことによつて、すべてが覆われたと思う。すべてはうまく運んだと思う。「それで、万事よし」と心で思う。まさに、「人の思い」とはその程度のものである。

私の思いで神を知るのではだめだ。ダビデは神を知っていた、にもかわらず、彼は、神を忘れた。否、彼の内にあるあの「おどろ、おどろした罪」が彼を支配してしまつた。そしてそれに振り回され狂気を演じた。「人の罪」の恐ろしさと深さとをダビデ王に於いて私たちは今さらのように見せられる。

このように「私が神を知っている」ということは、「罪」の力のまゝには、なんの助けにもならない。神を知っている「私」は、「わたし」にとつて、本当の助けにはならない。そのような「私」は幻想であり、虚構にはかならない。

にもかかわらず、この「私」についての事実にはいつまでたつても気付くことはない。幻想の私、虚構の私の上に、政治も経済も、学問も芸術も、さらに宗教すら建てている。そのような幻想の私、虚構の私によつて主義主張がなされ、国家が形成され、科学がなされ、生活が営まれている。しかし、それらは決して完成することなく、必ず、自らの幻

想性、虚構性のゆえに、空しく消え去る。幻想は実体無く、虚構は光りの前にその愚かさを暴かれるからである。

聖書が示す神は怒りの神ではない。どこまでも人を愛する神である。人とは神に願いをかけられている存在である。人が神に願いをかける以前に、人は神に願いをかけられているのだ。そのような自分であることに気付くことが、神の愛を知るということである。

神の願いとは何か。それは、神の願い心そのものである。では、その願い心とはなにか。それこそ、人に神の命を降り注ぎ、人を神の命に生かすことである。これが神の愛というものの内容にはかならない。

人も人を愛する。しかし、人の愛は人を神の命に生かすことは出来ない。人が人にどれほど愛されても彼は空しく死ぬ。

しかし、人が神に愛される時、彼は死なない。例え死んでも死なない。彼の命は神にあって永遠に輝き生きる。

神の愛は人を支え、生かす恵みの働きである。この神の支えの上に人は今生きており、その恵みを知ることが人生の課題であり、人生の意味であり意義でもある。

この世のすべてのことは、その神の愛と恵みと願いの心とを語っている。しかし、人はそれが聞こえない。それが見えない。そればかりか、それを見ようとも、聞こうともせず、ただ自分の欲に振り回されて生きている。ダビデ王もその罪に囚われた。

×
それでも神はダビデを愛される。彼に一人の人を送られた。

神はナタンをダビデのもとに遣わされた。ナタンは来てつぎのように語った。

「二人の男がある町にいた。一人は豊かで、一人は貧しかった。豊か

な男は非常に多くの羊や牛を持っていた。貧しい男は自分で買った一匹の雌の羊のほかに何ひとつ持っていなかった。彼はその小羊を養い、小羊は彼のもとで育ち、息子たちと一緒にいて彼の皿から食べ、彼の腕から飲み、彼の懐で眠り、彼にとっては娘のようだった。

ある日、豊かな男に一人の客があった。彼は訪れて来た旅人をもてなすのに、自分の羊や牛を惜しみ、貧しい男の羊を取り上げて自分の客にふるまった。」

ダビデ王はその男に激怒し、ナタンに言った。

「神は生きておられる。そんなことをした男は死罪だ。小羊の償いに四倍の価い払うべきだ。そんな無慈悲なことをしたのだから」

その時、ナタンは言った。

「その男はあなただ。神はこう言われる『あなたを王としたのはわたしである。あなたにひつようなものをすべて与えた。不足なものは何でも加えた。なぜ、神を侮り、わたしの意に背くことをしたのか。あなたはウリヤを殺し、その妻を奪った。あなたはわたしを侮った』」

ダビデはナタンに言った。

「わたしは神に罪を犯した」と。

×
—サムエル記下十二章—

×
どのような人でも迷う。どのような人でも怒る。どのような人でも悲しみ喜び邪念をいだく。これは「罪人」の常である。しかし、その罪人なる自分を何処に持って行くのか、神の愛に投げ込むのか、どこまでも自分で持ち歩くのか。ダビデ王は神の愛に自分を投げ込み、そこから新しい神の命によって自分を立たしめることによって、その命は今も人々の中で輝いている。イエスさまは、今も人に神の命を降り注がれる。まことに、罪人なる「私」を救うものは神の愛だけである。

べしるちみ

神はすべてのものの上であり、すべてのものを通して働き、
すべてのものの内におられる
—— 聖 書 ——

恵む命に包まれている

茶道には、昔から「守、破、離」という言葉があるので、その道の方から聞いたことがある。

「守」とは、先生の教えを固く守って、すでに出来上がっている規定どおりに従って行くことである。そして、「破」とは、教えられたとおりに従うことから、自分の特性や獨創性を展開していくことである。さらに、「離」とは、「守」と「破」とを通り越して、まったく何ものにも囚われることのない自在な境地に立つことをいう。このような歩みによってこそ、茶に志す者はその道を極めることが出来るのだといわれる。

考えてみると、このことは、ひとり茶道にかぎったことではなく、私たちが為すすべての業においても言えることであり、さらに、この世の一切が生成発展して行くために必ずたどる筋道でもある。だが、すべてのものがそのように良く発展して行くとはかぎらない、途中で混乱をしたり、挫折をしたり、消滅してしまうということだである。

例えば、私たちの人間としての成長の過程を「守、破、離」という観点からみると、はじめは、ひたすら親や先生が教える一般的な教えに自分を当てはめようとする「守」の生

き方をする。そして、そのように生きることが最も正しい生き方だと思っている。このような時代に、ときとして、いろいろな疑問が自分の内に生じ、また、なんらかの反発や抵抗も生まれてくるが、自分の内には未だ、それなりのまとまった考えがないので、結局、その教えに従うことを持って良しとする。このような生き方の時代を「守の時代」と呼ぶことにしよう。

守の時代は受け身の時代でもある。ひたすら学ぶ時代でもある。この場合の「学ぶ」とは、「真似る」という意味であって、その学ぶものに自分を同化していくことである。

未だ自分のものがなく、あるのは、与えられた教え、規範だけである。このような時代は、一種の精神の停滞期であり自分自身の存在感がはっきりしない状態にある。

しかし、そのような状態に何時までも留まっていけない自分が、やがてじよじよに育って来る。つまり、「破」が自分に訪れて来る。「破」とは受け身に生きていた自分が破れることである。しかし、ただ破れることではなく、新しい自分の出現、新しい自分の誕生、新しい自分の創造の出来事でもある。このような時代を「破の時代」と呼ぶことにしよう。だが、誰にでも「破の時代」が来るのではない。よく「守の時代」を生きた者だけに「破の時代」が来る。

一があって二がある。また一と二とに続いて三があるので決して三だけが突然に出てくるのではない。なにごとにおいても順序というものがある。

私たちが、何かを習得しようとするとき、先ずそのものの

基本をしっかりと身につけなければ、それを良く自分のものとすることは出来ないといわれる。これはものごとの順序であらう。

「守の時代」とは「一」であり、「基本」であり、ひたすら「学^まねる時」である。このように熱心に「守」に徹してこそ、初めて「破」が生じるのである。

「守の時代」は忍耐の時でもある。「こんなことをしてよいのだろうか」と疑問が焦りの中に生じてくる。

「守の時代」は反復の時でもある。「これが一体、何になるのか」と思う。そして、その単調さに怠惰の情が生まれてくる。

「守の時代」は見つめる時でもある。「いくら見つめても、求めても何も見えず、何も与えられない」と不安が起こってくる。

しかし、疑問と怠惰と不安とをよく乗り越えて「守」に徹する者だけが、正しく「破」に至る。

「守」は「破」を生み出す母である。だが、正しく「破」に到る者は多いようで、はなはだ少ない。

多くの者は、「守」に埋没してしまふ。与えられた通りに生きることだけに満足して、そこに留まり安心する。すでに作られたものを身につけ、すでに敷かれたレールの上を歩み、自分のものではない知識を振り回しているにもかかわらず、それをあたかも自分のもののように思い込んで自分を生きる。

「守」に完全に埋没した者の生き方のことを「世俗的な生き方」という。世俗的な生き方が悪いと言っているのではない。自分の生き方を自覚的にもつことなく、世間の風潮にただ振り回されて生きていることは本当に自分を生きたことにならないのだ、と言っているのだ。

そのような者は、結局、見ることに、味わうことに、聞くことに、触れるこ

との表面的な感覚の楽しさを満足し、それを基準にした損得勘定で自分の手足を動かしている。彼等は甚だ利己的で、賢そうに噂話をすることで自分を確認する。このような生き方をする人が、その学歴や社会的地位、職業の如何にかかわらずこの世に満ち満ちている。

「守」に埋没して「破」に到るためには、徹底して「守」を生きることである。

どのような教えでも、どのような規定でも、どのような形でも、すでに有り続けてきたものには必ず真実が秘められている。その真実の故にそれは有り続けて来たのである。だから、ある教え、形などに従って生きることに、即ち「守の生き方」をなすのは、そこに秘められてある真実に触れ、自分のものとしてそれをしっかりと把むためにはかならない。

すでにあるものを見つめつけ、行じつづけるためには忍耐と真の意味での知性が必要である。やたらに忍耐するのではなく、熱心な求道心をもつことである。やたらに知識をもつのではなく、深く鋭い洞察力をもたねばならない。このように「守」を生きるとは、正に修行者の生き方だといえる。私がいつも言う「この世は道場である」という理由がここにある。人生とは、すべからず修行である。

修行は苦しい道ではない。「守の生き方」に徹するとき、必ずなにかが見えて来る。感じてくる。そのものの内に秘められている真実が顔を出しはじめる。これこそ正に「守の生き方」から「破の生き方」への移行の時である。

そのとき彼の生き方は喜びに変わる。自分が見出した真実が自分を引っ張ってくれる。忍耐が希望に変わり、不安が自信に変わる。彼は自分の存在を重たく感じる者となる。

このように「破」とは、自分の自覚のときであり、新しい自分の誕生の時でもある。自信と希望とはその者の生き甲斐となる。

だが、ここにも落とし穴がある。それは「慢心」である。自分一人が偉いと思ひ込むことである。それは同時に、他を愚かと思ふことでもある。

世の中にはこの類の慢心者が多い。「守」に埋没して全く世俗化してしまった者も好ましい者ではないが、「破」による慢心者はそれをはるかにしのいで嫌なものである。

そのような者はときとして独善的である。ひとりよがりの者である。排他的である。敵対的である。謙虚さに欠けており、慈愛の思いが欠如している。打算的で冷酷である。

x x

「破」に生きる者にとって最も肝要なことは「謙虚心」を持つことである。謙虚心を持つとは、素直な心根を持つことである。そして素直な心とは、物事に対して逆らうことなく、そのものありのままを見る心であって、決して自分をかざらうとしない心を持つことだと思ふ。

慢心は「破」を生きる時の落とし穴だと言ったが、慢心はものごとを正しく見る目を曇らせる。美しいものを見ても、その美しさが見えない。真実なものに関わっても、その真実が悟れない。善なることに對してもそれを正しく理解出来ない。偉大なることや人に出会っても、その偉大さを認められない。すべては、「豚の前の真珠」となる。

しかし、謙虚心は慢心を追い払う。謙虚心は慢心の目では決して見ることが出来なかつたものごとへの美しさ、善さ、偉大さ、真実なること等を見る目を与えてくれる。

慢心に生きることが、自分という小さな殻のなかに自分を閉じ込めて生きるようなものである。彼は自分の素晴らしさ、本当の命の輝きと永

遠性とを知ることなく、ただ小さな小さな自分という世界に生きる自己満足者である。そのような人は、この世に生きていながら、この世に生きた者に相応しいものをなにひとつ得ることなく暗闇の中へ消えて行く。

だが、謙虚心は自分を外なる世界に向かつて開ける。彼はその素直な心によって、そこに充滿する命の輝きとその永遠性とを知る。そのような人の心は洗われ、暗さと汚れとがその人から去り、彼は光り輝く。

そのとき、「離」の心境が生まれてくるのである。

x x

「離」とは離れることである。ものごとに対する執着心から離れることである。

わたしたちは、このような「離」の心境に生きることは至難の業だと思ふ。しかし、そうではない。誰にでも出来る生き方なのである。

「離」は執着心から離れることであると言ったが、むしろそれは、ものごとを楽しむことである、と言った方が適切であろう。

捨てる。離れる。と聞くと、捨てがたく、離れがたい。自分にはどうして出来ないと思う。物事に執着する心は、その欲の思いとともに捨てがたく、離れがたいものである。

ものごとを楽しむと言うことは、そのものを深く味わうことである。そのものに囚われていては、そのものを味わうことは出来ない。「あばたもえくぼ」というように、そのものに囚われてしまうと、そのものの醜さも美しく見えて、本当の姿が分からなくなる。また「坊主憎けりや袈裟まで憎い」ように、そのものを憎く思うと、その者の着けているものまで憎く思えて一切を正しく見ることが出来なくなってしまう。腹立ちの思いをもって食事をしてはそれを味わうことは出来ない。落ち着いた思いで、食物を前にしていただくとき、そのもの持つ本当の味を楽しむことができる。「離」の境地とは、ものごとを味わい楽しむ境地で

ある。

しかし、「離」の境地は、それだけではない。ものごとを味わい楽しむそこに恵みを覚えることである。一碗の御飯にありがたさを知ることである。一日の生活に感謝することである。一輪の花に命の輝きを見てそれを恵みと感ずることである。この世のすべてのことがらのなかに秘められている恵みを知り、それを味わい楽しむ境地こそが「離」の境地にほかならない。

ものごとの表面を見ていると、さまざま姿がそこにある。腹立たしいこと、恨めしいこと、憎きこと、楽しいこと、美しいこと、善なること、悪なること、得なこと、損なこと……、さらに、その現れている姿形もいろいろである。草、花、樹、昆虫、動物、雲、水……、それらはさらに形を変えて存在している。詩人はそれらが語る悲しみや喜びの命の営みを美しく詩う。

このよのすべてのものは、その根源に恵みの命をいただき、その命をさまざま姿で現しているのだ。死さえも、その恵みの命の現れなのである。この命に目覚め、その有難さの内に生かされている事実を、すべてに見、味わうことが、恵みを覚える「離」の境地なのである。

わたしたちは、「守、破、離」ということにより、人生の道筋について少し考えてきたが、それは一つの表現であってこれにとらわれることはない。大切なことは、一回限りの自分のこの世での人生を、それに相応しく生きることである。そのためには、ここで述べた「離」の境地にいたることが、この世に生を与えられた人間として最も相応しいことであると思っている。

わたしは、この大切なことを聖書を通し、イエスさまの生きざまとその教えから示された。

聖書は私たちが「離」に到らせることを唯一つの願いとしている。離の境地に生きることを「魂の救い」と聖書は言う。すべてのものを恵み生かし導く命の根源、それを神と呼ぶ。イエスさまは「お父さん」と親しく呼ばれた。父なる神は愛である。恵む方である。善く導く方である。命輝かせる方である。わたしたちが見るもの、聞くもの、嗅ぐもの、触れるもの、感ずるものすべてが、父なる神の恵む命の現われである。そして、当の私達自身も父なる神の恵む命の現われそのものだ。それは、増えることもない、減ることもない、永遠に満ち満ち光り輝いている。そこには敵もなく味方もない。過去も未来もない。男も女もない。動物も植物もない。天も地もない。一切が神の恵む命で包まれており、神の恵む命が輝いているだけである。このまぎれもない現実に自分が今立ち、包まれ、生かされていることに気付くことが「離」の境地そのものなのである。

自分が努力して「離の境地」に立つのではない。私たちは何時までも「この私」である。「どうしようもない困ったわが身を引かずっている者」である。にもかかわらず、「離の境地」はすでに、父なる神の恵みとして、私たちの足下に輝いて在る。イエスさまは、「よくよく見なさい」と言われる。「目があっても見えないのか」と促される。「耳があっても聞こえないのか」と語られる。

使徒パウロは次のように歓喜した。「わたしたちを愛して下さった方によって、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある。わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いところにいるものも、低いところにいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリストイエスによって示された神の愛から、私たちを引き離すことはできない」と。

べしるちるみ

「わたしたちはキリストに対する信仰により、確信をもって、大胆に神に近づくことができます! — 聖書 —

「聖なる言葉」をいただく

白隠禪師にまつわるいくつかの逸話のなかで、今でもよく覚えていっている一つがある。

その村の質屋の息子は、仏道信仰にとても熱心で、白隠禪師を尊敬していると教えを頂いていた。ところが、その父親というのが、とてもケチで、この世はすべて金だと思ひ込み、ひたすら金銭の勘定だけに興味を持ち、息子が仏道信仰に熱心になることをこころよく思っていなかった。

ある日のこと、こうした悩みを息子は白隠禪師にうたえたと、白隠は次のような案を出した。

「こうしたらどうじゃ。おまえのお父さんの称えた念仏を私が買うことにするから、帰ってそう言いなさい。念仏を一回称えるたびに、いくらといってお金を払ってあげるわけじゃ。これなら元手もかからないし、おまけに、金が入ってくるわけだから、お父さんは文句は言うまい。」

家に帰った息子が、この話しをすると、父親は、こんな案な金儲けはない、と言って、明るる日から、さっそく白隠禪師のところへ来て、念仏を称えはじめた。はじめのうちは十回につき一文であったが、称えるのが上手になるにつれて値があがっていった。家の商売よりも儲かるので、父親は毎日喜んで白隠禪師のもとにやって来ては、一日中熱心に念仏を

して、夕方にはお金を買って帰っていく。そして、念仏がもっと上手になるようにと、家でも練習に励んだ。このようにして、父親の生活は、昼も夜も念仏、念仏、といった生活になったのである。

そのようにしているうちに、父親はだんだん不思議な気持ちになってきた。わけもなく有り難く、なんとも言えない清々しい気分がされてくる。金銭の勘定をしているときは全くちがった安らかな気分。そして、金銭の楽しみがとてもちっぽけなものに思うようになった。

そのようなある日、父親は言った。
「白隠さま、もうお金はいりません。お金を頂くのは勿体ないことです。仏さまのお慈悲の尊さが、わが身に滲みまわります。」

父親は息子に自分の愚かを深く詫び、それからは、息子よりも熱心な信仰者となった。

私は、ただ、白隠禪師を誉め、仏教を讃えているのではない。かの父親が生まれ変わったことに、限り無く注目したいと思う。

念仏を称えるということは、わたしたちの日常的な生活にはない。暇な人間が、自分の信仰という好みですることのようには思われているのが念仏を称えるということである。つまり、念仏を称えるということは、この世で生きていく自分にはどうでもよいことであり、もし、念仏を称えるとするならば、この世に生きる自分が、より一層、この世で楽しく生きていくために利益をもたらすならば、方便として称えてもよ

い、と多くの人は考えている。このことは、先の父親も同じであった。しかし、かの父親は、念仏を称えているうちに、自分が変わっていくことに気付けはじめた。それだけではない、わけもなく有り難く、清々しい気分を満たされる自分に安らぎを覚えるようになっていった。一体、父親の心のなかで、どのようなことが起こったのだろうか。

×
何度も言うが、私は念仏の話しをしているのではない。父親が変わっていった事実には思いを向けているのである。

×
白隠さんの話しが出てきたので、ついでながら、彼の仮名法語のなかにある「草取唄」の一節を紹介しておこう。

善きも悪しきも餘処から来ぬぞ。迷う我が身のころより。

惜しや欲しやと思ふが餓鬼よ。餓鬼の種とて外にはないぞ成るもならぬも心の儘よ。

智者も善者も浮世を見るに、色と金には皆迷う。

先の父親の変化は、その心が変わったのである。というより、心の向きが変わった、といった方が正しいかも知れない。

彼の、心はこの世だけに囚われていた。だから、この世の事だけにその思いを向け、この世の事だけが自分の生きるよりどころであったし、この世だけしか彼は知らず、この世を超えた世界に全く気付くことなく生きていた。このような人間にとっては、この世で楽しむことだけが生きる目的となる。そして、そのように生きることが、自分を生かす最善の方法だと考える。

ところが、そのような生き方をしていた父親の心が、念仏を称えることによって、少しずつ、この世を超えた世界の方に向きを変え始めたのである。私たちは「念仏」という言葉にとらわれてはならない。ここでいう「念仏」とは、この世を超えた世界を指し示す言葉のことである。それは、世俗の言葉ではなく「聖なる言葉」のこととして理解したいとおもう。その意味で、イエスさまの言葉も、聖書の言葉もこの世を超えた「聖なる言葉」である。かの父親は「聖なる言葉」を称えることよって、今まで自分の心が向いていた方向を知らず知らずの間に変えてしまったのである。

×
ここで、少し立ち止まって、「心」について確かめておきたいことがある。それは、「心」と言うとき、その内容は、私たちの知能や感情や意志などの一般的な働きを言っている。それに対して、「こころ」と言うとき、その内容は、先の「心」の働きを支えるところのもの、言い換えると、私たちのいちばん奥にあって私たちをわたらしめているそれ、だといえる。したがって、「心」は「表面に現れた私」であり、「こころ」とは「わたしの奥にある本当のわたし」であると言える。この「こころ」が「魂」と言われているものである。

×
このことを確認したうえで、私たちは、私たちが持っている知能も感情も意志も肉体も、わたしの内なる「こころー魂ー」の在り様一つで、どのようにでも、その方向が決定される、ということを知っておきたいと思う。なお、以下「こころー魂ー」のことを「魂」と記すことにする。
×
（このことについて関心のある方は、私の個人誌「ロゴス」をご覧下さい）

×
「あなたの宝があるところに、あなたの心もある。」とイエスさまは

言われた。本当にその通りである。自分が最も関心を寄せているその処に、私たちの「心」はある。しかし、その時でも、私たちの「こころ」は決してそれで満足はしていない。私たちの内なる魂は眞実なるもの、感覚的満足を超えた眞実なる喜び、清さ、平安といったより高次の世界に自分を向け、その世界を知ることを中心にして求めているのである。しかし、わたしたちは、自分の内なる魂の求めに応えようとはしないで、表面的な感覚が求めるものに支配されて生きている。そのために、内なる魂はあたかも深い眠りにある者のように、魂自身が秘めている素晴らしい働きが出来ずにいる。

この自分の内に眠っている魂の働きを活性化するための方法はただひとつしかない。それは、眞実なるものの言葉を聞き受け入れることである。それによって、眠っている魂は目覚めると共に力が与えられて働き始める。そのとき、世俗的な心で見えていたときには、少しも見ることが出来なかつた眞実が、自分の周りに在るすべてのものの中に見出すことが出来るようになって来て、今までの世俗的な喜びではなく、こころの深いところでの喜び、平安、讚美、畏敬、感謝などが自分を満たすようになる。そして、その人は、自分が、人生の一部分しか見ていなかったことの誤りに気付くようになる。まさに、先の父親に於いて起こったのはこのことだったのである。

×
イエスさまは或るとき、神さまのお恵みに目覚めた人についてお話しをなさった。

「それは価値ある眞珠を探し求めている商人のようである。商人は高価な眞珠一個を見つけると、行ってすぐに自分の持っている物を全部売ってしまつて、それを賣う。」
— マタイ一三、四五 —
また、使徒パウロは、次のように告白した。

「わたしは、キリストさまをよくよく知り、その価値の偉大さの為此の世で良いと思つていたすべてを失つてしまつたが、それらを屑のように思つている。」
— ビリビ三、八一 —

私たちの内なる魂が眞実なる方の働きかけにより目覚め、眞実なる方の方に向かつて動き出すときの様子を、イエスさまは、価値ある眞珠を探し当てた商人のようなものだ、と示された。また、使徒パウロは、キリストさまの救いの偉大さに目覚めた魂は、表面的な感覚が素晴らしいと思つていたことが、「屑」のようになってしまつた、と言つた。

×
私たちは、この世の知識を得、表面的な感覚を満足させることが自分の魂を育てることだと未だに思い込んでいる。或る人は、キリスト教の信仰を身に付けるために、謙虚な態度で聖書に聞き、畏敬の念をもって祈り求め、すべてのことがらに尊敬の感情で関わることを忘れて、神学を大学に学びに行った。おそらく、その人はいつまでたつても自分の魂を神に向かつて目覚めさせ、魂が見る素晴らしい命の世界を知ることができないであらう。

また、敵意や争い、嫉みや怒り、利己心や不遜な者は、決して自分の魂を輝かすことは出来ない。そのような人の魂の感覚は鈍り、この世のものを通して語り示されている眞実なるお方の「聖なる言葉」を聞くことはできない。

×
道徳的に立派な人間になれ、というのではない。自分の内なる素晴らしい魂の働きを目覚めさせる為には、素直こそ、謙虚こそがただひとつ道だと聖書は教えている。

「空の鳥を見なさい。野の花を見なさい。」とイエスさまがいくらか示されても、素直になれず、謙虚になることが出来なければ、その人のところは、何も見ることが出来ない。ただ、空に鳥が飛び、野に花がある

だけにしからずない。

私たちは、自分の魂を眞実なものに向かつて、いっばいに開かれたものとしなくてはならない。眞実なものは、すべての美しいもの、すべての清いもの、すべての喜ばしいもの、すべての明るいものことである。そして、それは、もっぱら、自分の魂を活性化させるため、眞実なものを讚美し、尊敬する為にのみなされるべきであつて、決して、自分の表面的な感覚を満足させ、自分の小さな心を喜ばせ、自己満足をするためのものであつてはならない。

私たちの内なる魂は、いつも眞実なるものを求めている。人はすべて神に相對する者として創造されている、と聖書は教えている。だからどのような人も、神に出会うまでは本当の安心をえることは出来ない。そして、人とは、その神、その眞実に願われ、呼び掛けられている者なのである。人が願ひ、呼び掛ける以前に、神が呼び掛け、願ひていられるのである。だから、神は愛であり、眞実なのである。新約聖書はこの神の私たちに對する願ひと、呼び掛けと、引き寄せと抱き上げとが、イエスさまによって成就し完成したのだと教えている。まことに有り難きことである。しかし、その事實に氣付かぬ者にとっては、何事も起つていないのと同じである。

自分の魂を神に向かつていっばいに開けるといふことは、呼び掛けられている神の声を聞くこととすることであり、神の願ひがわが魂に向けられていることを知ろうとすることである。さらに、神に引き寄せられ、抱き上げて頂いている我が身を知ることにはかならない。その神に應へることが信仰である。まさに「信仰とは神への応答」なのである。

今、神への応答について、最も基本的なことを示そう。それは、日々

私たちが行ふ事柄とは、まったく違った内容のために費やす時間を自分の生活のなかで作ることである。その時間は、例え五分だけでもよい。静寂を自分の内につくり、自分の魂を「聖なる言葉」にいっばい開放つのである。そして、その言葉で自分のすべてを包むのである。

或る人は、「私にとつての『聖なる言葉』は『主(イエス)は我が牧者』です」と教えて下さつた。彼は、日常に起こるすべての事柄を、その前に置くのである。しかし、そのとき、その事柄の一つ一つにどのような感情もいだいてはいけない。例えば、悔いるとか、誇るとか、喜ぶとか……。大切なことは、それらの一切が神の愛に抱き抱えられていることを冷静に、かつ客觀的に確りと確認することである。その時、私たちは、自分の側からではなく、神の側、主の側から自分を見ていることになる。それが「主はわが牧者である」という聖なる言葉のその人にたいする語りかけなのである。

イエスさまは、はっきりと言われた。

「わたしの言葉に留まるならば、あなた達は本当にわたしの弟子である。あなたたちは眞理を知り、眞理はあなたたち

自由にする」

—ヨハネ福音書八、三一—

世俗の言葉が私たちの周囲には氾濫している。そのような言葉をどれほど自分の内に聞いても、魂には届かない。それどころか、私たちの「心」は荒れすさむばかりで、ますます不満と愚痴と欲が増すばかりとなる。自分の魂に「聖なる言葉」を注ごう。求めるならばそのような言葉はある。今わたしは、聖書に於いて、イエスさまの言葉を我が魂にいただいて、私の人生は荒波の中に在つても、「聖なる言葉」の内で平安を得ている。ただ、有り難さだけが残る。

べしるちるみ

—言葉のイエ—も生きるでんえたと、者は信じるをわたし

かいてるはえは備

世界の先進国の中で日本人は貯蓄率が一番だと言われている。つまり、「将来に備えてお金をためておく」ということに、とても智慧深い国民だということになる。しかし、一方においては、社会保障という行政の遅れが国民を「自分の暮らしは自分で守らなくては」という危機意識を生み出した結果が、「将来に備えてお金をためておく」ということになったのだともいえる。とすれば、それは日本の政治の貧困さに対する庶民の自衛の知恵のあらわれだといえる。今流行の言葉でいえば「政治不信」の結果の智慧だといえる。

「将来に備えて」ということは子どもにも一よい学歴を身につけておく」ということにおいてもあらわれている。有名な学校を卒業するということは、社会で高い地位につけるということであり、それは経済的によい暮らしができるということになる。そしてそのような暮らしをすることが、幸福な人生を過ごせるのだという言わば人間が幸福になる為の公式となつて、多くの人々に受け入れられている。そして、世の親はその公式を信じ込んで、有名校を目指して自分の子どもも能力も見極めなままに、お金を掛けて叱咤激励する。

「将来に備えて今を生きる」ということは、人間としてとても大切な智慧である。そのためにお金をためるのもよいであらうし、有名校に子どもを入学させようとするのも智慧の

ひとつである。

しかし、今、わたしたちが忘れていた大切なことがひとつある。それは、「自分の死への備え」である。「私は死ぬ者である」ということほど、私達にとってこの世で確実なことではない、にもかかわらず、私達は少しも自分の死への備えを為そうとしない。お金を蓄え、よい学歴を身につけさせようとする智慧は盛んにはたらかせても、なぜ死への備えに対する智慧をはたらかせないのか。

ある人が言った。「戦後、日本の社会は「いかに生きるべきか」だけのテーマでうめつくされて来た。特に急激な科学技術の発達で、生は死を超えられようという生の過信を、人間に芽生えさせた。現代人の目は忌むべき死から離れ、生に集中した。死の恐怖の生々しさが社会の表面から消え失せ、かわって現実の生をいかに、楽しく享受するかということに人生の重点が移行した」(死の復権—室生忠著) 本当にその通りだと思う。「いかに生きるべきか」だけに自分の思いを向け、智慧をはたらかせることに熱心になり、そうすることによつて、あたかも死が乗り越えられるかのような幻想をいだいてしまひ、あげくの果てには、死というものが自分には無いもののように錯覚するに到つたのが、今日の私たちではあるまいか。

だが、死は厳然として私たちに臨む。私たちが死に対してどのような態度をとろうがとるまいが、一切関係なく私たちを容赦なく捕らえる。

私たちは死について語る場合他人のこと、一般的な出来事として語る。

今までは他人のことだと思つたに、おれが死ぬとは

こいつあたまたらん

と十返舎一九は詠つたが、だれもが「自分の死」はいつも計算外なのである。だから「自分に死が」臨むとき慌てふためき狼狽する。私たちは今、死に對してなんの備えもしていないのだ。

何事においても、備えなくして襲われるときの被害は、備えをしていない程度に比例して大きくなる。極度な不安と恐怖、孤独と絶望のなかで気が狂わんばかりとなる。しかし、それに対する術を誰も持たない。その結果、勢い薬物で麻痺させ、結果は自分自身で死を乗り越えることが出来ないまま、恐怖と悲しみの真つ暗闇の想念を自分の思いの内深くに秘めたままであの世へと連れ去られる。そのような者は必ずあの世で迷う者となつて、いつまでたつても明るさの中に浮かべられることなき魂と化す。今日、このような死を迎える者が日増しに多くなつてゐる。

死を乗り越えることにおいては、この世の権力者も億万長者も、学歴の高い者も、さらにこの世での功労者も全く関係がない。この世のため、どれほどの備えをしていたとて、死への備えのない者は絶対に死を乗り越へることはできない。その魂はみな迷う。私は現に迷うている多くの魂を知つてゐる。

人々が物とお金にのみ、ひたすら目を向けて生きる生き方に囚われて来た結果、生きることに行き詰まり現象がいろいろなところに噴き出すに到つた。自然破壊、老人問題、医療問題、ガンの告知の問題……それらは社会的な構造そのもの問題として、私たちの前に噴出して来ている。そこでは、もはや、「生きる者」としての人間よりも「死ぬ者」

としての人間に目を向けなくてはならない状況が、私たちの前に好むと好まざるとに関わらず現れて来た。今までの医療の在り方でよいのか。

自然に對する関わり方が、今までの人間中心主義、経済至上主義的なそれではよいのか。老後の生き方は物とお金があればそれで全部解決といえるのか。人格的な生命を失つた状態、つまり植物化した肉体を機械で生かすことだけで、人間の生の尊厳は保たれるのか。このようなことを取り上げて行けばきりが無いほどである。

先日、興味ある調査結果をNHKのテレビニュースで聞いた。それは臓器移植や病院などでの医療の在り方に対する医師と看護婦との受け取り方の相違ということであつた。医師は臓器移植に賛成する者が多いのに對して、看護婦は賛成する者が半数に満たなかつた。医療の在り方についても答えは同じであつた。これは、とても興味深いことである。医療の現場で日頃病と闘つて苦しむ患者と最も多く接し、患者の生しい姿を見、触れ、聞いているのは看護婦である。いわば、看護婦は「生きる者としての人間」と「死ぬ者としての人間」とを直にまると見て知っている者なのである。

「先生、出来たら、くすり漬にされる病院よりも、自宅で見てあげる方が絶対にいいですよ。患者さんはほんとうに可哀そうです」と、しみじみ私に語つてくれたのは、長い間老人病院で看護をして来たべ、てらん看護婦さんである。

そこでの問題は、技術や経営が先に走つて、患者の魂がまったく省みられないという状況である。特に、死に行く者は何もその備えを持つことなく死んで行く。このことは病院や医師や看護婦の責任だけではない。死に行く者の周りにいる親、兄弟姉妹、友人……すべての者が、そして当の本人自身も「生きる備え」の智慧は持つていても「死に對する備え」は何一つとして身につけてはいないのである。そのような人間から

出て来る言葉は「しっかりするのだ。しっかりするのだ」という空しい
励まし言葉と「どうしよう。どうしよう」と思う悲しみと不安と絶望
の言葉だけとなる。

突然に、「後〇ヶ月です」と医師の宣告を受けたA子さんに、不思議
な縁で私は関わるようになった。発見した時には所謂「末期のガン」
だったのである。勿論本人には事実は伏せられ、家族にだけ医師は知ら
せた。六才のお嬢さんを頭に二人の男の子がいる若いA子さんの御主人
やその家族の方々の驚きと悲しみ、苦しみとは言葉にできないほどであ
ったに違いない。

「末期のガン」という診断は「死の宣告」と同じである。しかし、私
はそのように思っていない。なぜなら「死と生」とは神の手の中に
あって、絶対に人の手の中にあることではないからだ。その病状が
どのようなものであれ、その人の生と死とは誰にも分からない。
神が許し給わなければ、生も死も、否、頭の毛一本たりとも抜けて落ち
ることはないのである。しかし、人はこの事実を知らない。生も死も人
の手の内にあるものと思ひ込んでいる。

私たちは自分で生きていてのではない。私たちは自分の生と死とを神
さまによって生かされているのである。そして、医療とは、その生かさ
れている一部分をよく生きるように手当てする為に許されている行為で
あるのだ。しかし、医療に携わる者は、人の生死を自分が握っている
と思ひ込むことがある。また、治療を受ける者も、医師が自分の生死の
すべてをつかんでいる者であるかのように思ひ込む。

A子さんの病状がどのようなものであれ、私はその生死は神に委ね、
私がA子さんに分かち与えられるものを受け取っていただきたいと願っ

た。

その願いと、A子さんが自分の生と死とを乗り越えていただく境地
に導かれると言うことであった。別な言葉で言えば、A子さんの魂の救
いということである。

しかし、それは実際の事として容易なことではない。先にも語ったよ
うに「生きることの智慧」しか求めず「死に対する智慧」を学習してい
ない今日の人々に「生と死とを乗り越える智慧」を持っていたらには
どうすればよいのか。

未だ、自分の病状を自覚していられず、ただ手術とその結果に
不安を覚えているA子さんを見舞ったわたくしは、「A子さん。あなた
は今自分が生きて行くうえで頼りとする何かをお持ちですか」とたずね
た。「いいえ、そのようなものは何も持っていません」という答えが
返って来た。

不安は「安心を求める思い」を人の内に生かしめる。すでにA子さん
のその内には「安心を求める思い」が生まれていた。

その人の内にある「思い」が、その人をその思いのように造るのであ
る。不安の思を内に持つ者は不安なその人を造る。安心の思いを持つ者
は安心なその人を造る。問題は、私たちが何処から「安心の思い」を頂
き自分のものとするか、ということである。

自分が人生を生きて行くに於いて、本当に頼ることが出来るものを持
っている者は、その頼るものから「安心の思い」を頂くことが出来る。
生きることにだけ頼りになるものは本当の安心ではない。死ぬべき自
分をも委ねていけるような頼りになるものこそ、本当の安心の思いをそ
の人に与える。

人は病に倒れるとき、生きることだけに頼りになるものは、自分に

本当の安心を与えてくれないことを知る。お金、食べ物、着るもの、住居、趣味、教養、娯楽、名譽、権力、遊び友達、無責任なお世辞………これらの生きていくことの智慧、生きることに智慧だけでは、もはや癒しがたい不安が病む者には襲いかかる。

人は自分が病むとき、初めて「自分の死」ということを考えるようになる。「他人の死」ではない。「お気の毒だ」と思う「他人の死」ではなく「自分の死」ということに自分の思いが直面する。そのとき、「他人の死」に対処できた自分の思いでは「自分の死」にたいしては対処できなくなる。他人には恰好のよい言葉を語っていても、その思いでは最早「自分の死」は乗り越えられなくなる。自分が張り裂けるような不安と苦悩とがその人を捕らえる。

A子さんの病状は日を増すに従って悪化した。それと同時に、今までA子さんの内で「生きることに対して持っていた智慧と頼りになるもの」が崩れ去っていった、が、その一方で本当に頼りになるものを求める思いがいよいよ強くなって行った。それは不安と安心との狭間にあつて、極度にその思いが大きく、激しく揺れ動く姿に最もよくあらわれた。「安心だ」と思う後から「どうすることも出来ない不安」が襲いかかって来る。まさに、それは「生きることに対する智慧と頼りにしていたもの」とが崩壊して行く過程でもあったのだ。つまり、死に對してなんの備えもなく、ただ生を生きていくことの為だけに備えていた自分自身の崩壊の過程なのである。と同時に新しい自分、つまり生にも死にも対処出来る自分を生み出すための、産みの苦しみの時でもある。このときこそ気が狂わんばかりになる不安と苦しみ人が人を襲うのである。

A子さんも、この苦しみを通られた。そして乗り越えられた。

この世の生だけに執着して生きる古い自分が崩壊し、生も死も、この

世も死後の世も共に生きる新しい自分に生まれ変わったのである。

わたしはそれ以前に「羊を優しく抱くイエスさま」の聖画をA子さんに差し上げ、「A子さん、イエスさまにしっかりと抱かれて羊があたたかいです。イエスさまの懐で安心していなさい」と申し上げたが、A子さんは最後に我が身と魂、その生も死もすべてイエスさまの懐に委ねられた。そこへ到る道は決して易いものではなかった。しかし、そこに我が身を置いたA子さんのお顔は平安と喜びとに満ちていた。その言葉は祈りと感謝にあふれていた。A子さんは、みごとに「古い自分を脱ぎ去り、新しい自分に生まれ変わった」のである。

誰でもがそのようになれるのではない。諦め切れず絶望感に悶え苦しみながら息絶えていく人もいる。大切なことは、自分の内に死を乗り越えた本当の頼りになる命の働きを、自分の思いとして持っているかどうかということである。

A子さんは病院中に響き渡らんばかりの声をはりあげて「イエスさまあー、イエスさまあー、よろしくお願いいたします!!」と何度も何度も叫ばれた。イエスさまはその声に十分すぎる程に応えられ、光り輝く永遠の命をA子さんに与え給うたことを知るとき、A子さんの死は、もはや死ではなく、神のもとへと勝利の凱旋をして行かれた栄光在る生への出発であったと言える。

それにしても、この世での別れは辛い、とりわけ、御主人はじめその御家族の辛さは察してあまりあるものがある。特に母を亡くした幼い子ども達のこれからの心情の成長の道には、さまざまにつらく悲しいことがあるだろう。しかし、決して恐れることはない。神は必ずその残された御家族一人一人を守り祝福を与えて下さるに違いないし、そのようにあることを切にお祈りをさせて頂こうとおもう。

べしるちるみ

— 聖書の言葉 —
神の言葉は、わが足の灯火です。

人生が変わるⅡ

『この淋しさを誰に告ぐべきか 神に告ぐべし』
と、詩ったのは八木重吉である。

人は誰でも「淋しさ」を背負って生きていく。この世の何をもってしても埋めることが出来ないところに、淋しさの深さがある。

美味しいものを腹いっぱい食べることによってなくなる淋しさは、未だ淋しさではない。物をたくさん買い込むことによって消えていく淋しさは、未だ淋しさではない。社会的に高い地位につき、名誉を得、権力をもつことによって克服できる淋しさは、未だ淋しさではない。人と関わることによって癒される淋しさは、いまだ淋しさではない。

自分の内にもっている淋しさ、それはこの世のどのようなものをもって拭いさることが出来ない淋しさである。ぬぐうても、ぬぐうてもぬぐい切れない淋しさ、それが誰もがもっている淋しさなのである。

『のんきと見える人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がある』と夏目漱石は言ったが、こころの底に淋しさをもっているということにおいて、この世の人に例外者はいない。

このような淋しさは何処からくるのだろうか。それは、自分自身を支える支えを持っていないところから生まれてくる。

すこし難しくいえば、自分が自分であるという自分の存在の根拠、つまり自分のアイデンティティの消失が原因であるといえる。

人間だから。男だから。女だから。夫婦だから。親子だから。……と、ちょっと見にはそれで十分に説明がついたかと思えるそれらが、実は、なんの説明にもならない幻想にか過ぎないのだと、人々は気づきはじめていく。

「わたしが人間であるということはどういうことなのか」「男であるということはどういうことなのか」「女であるということはどういうことなのか」「夫婦ってなんなのか」「一体、親子とはなになのか」……難しい理屈を振り回そうと言うのではない。理屈ではなく生活の現場での実感としての疑問なのである。

なんの感動もなく、ただあくせくと生きている自分。深い共感も対話もない夫婦、断絶した親子、男であり女であるという自覚と誇りとを持ってない男、そして女。みんな淋しく不安で、その思いはイライラしている。

自分を満たすものを自分の外に求めることに慣れてきたのが私たちである。たしかに、私たちは多くの物を持った。そして自分を満たした。しかし、それは餓鬼地獄のごとくに、満たしても満たしても満足はなく、自分を落着かせてくれるどころか、かえって不満と不安、あせりと争いが増すばかりとなった。

それでもなお、自分を満たすものを自分の外に求めようと

しているのが今日の人たちである。

「人はパンだけで生きるものではない」とおっしゃったのはイエスキさまである。しかし、人はパンだけで生きるものであると、今なお思い込み、そのように思い込むしか人々は、自分を満たす方法を知らない。

x x x

私たちは、すべて年をとり老いを迎える。手足は思うように動かず、目はかすみ、多くのものを食べることが出来なくなる。自分が身につけていた知識も技術も名誉も誇りも、なんの役にもたたなくなる時が来る。趣味も過去のこととなる。友もいなくなる。大邸宅があっても自分の場所はずか一畳のベッドや布団の上だけとなる。

そのとき残るのは何であろうか。それこそ、自分の内に養い育ててきた自分の内にある魂の思いだけである。自分を満たすものを外に求めて得たすべては何の役にもたたない。

x x x

その人の顔は一生懸命になにかに耐えているように見えた。弱さと不安とを隠そうと努力しているように見えた。その人は世間でいう出世街道を歩んで来た人である。その人は近代の合理主義の洗礼を受け、「神なし」という生き方を誇りとして来た。自分の能力だけを信じ、その知恵と力で人生を切り開き進んで行くことが偉大な人間だと思つて生きてきた人である。神を口にし、神に祈り、神に畏敬を抱く者は、その人にとっては「愚かな者」であり「意気地無き者」のように見え、事実そのような者を嫌った。

数年前、ひよんな事からその人を病院に見舞うことになった。その人は私が牧師であることを知っていたが、「ありがとう」とは言っても、自分の心を開こうとはしなかった。こちらの思いも祈りも拒絶するような雰囲気を出させていた。しかし、それが虚勢であることは私にはよ

くよくよ分かつていた。心の内には不安と弱さが隠されていることは感じられた。しかし、その人はそれを見せまいと耐えているようであった。

「昔からそうだったのですが、入院してからは、一層ひどくなりまして」と、奥さんは言う。人が居ない時には、奥さんに怒りちらし、わがまま放題を言うのである。

「そうかとおもうと、弱音を吐き、俺はまだ死にたくない、などというのです」と、奥さんはおっしゃった。

x x x

自分の思いを開け渡すことが出来ない人は哀れである。本当にお気の毒である。自分の不安や悲しみ、淋しさの思いを訴え委ねるものを自身の内を持つことなく、ただ耐えるだけしかその方法をもっていない人は哀れである。

「この淋しさを誰に告ぐべきか 神に告ぐべし」と、八木重吉は詩った。彼は告ぐべき神を知り自分の内に持っていた。当時、結核は不治の病であった。彼は不安で不安で耐えることができなかった。しかし、その不安と悲しみの中から神に目を向けつづけた。神に自分の運命を委ね、神を呼びつづけた。

わたしは苦しい わたしは怖しい わたしは自分がたより
ない わたしはキリストに救ってもらいたい それが最後
のねがいだ

キリストが解決しておいてくれたのです ただ彼の中へは
いれたい 彼に連れられて行けばいい

こんな者でも たしかに救って下さると信すれば ただあ

りがたし 今ある生きる張合がしぜんとしてでくる

死んでもいいのだ 安らかに死んでゆけるものなら いつ死んでもいいのだ

本当に自分を支えてくれるものを八木重吉は知っていた。自分の存在の根拠を知っていた。自分の存在が神に支えられ保持されていることを彼はよく知っていた。

淋しい自分である、ということとはみんな同じである。しかし、その淋しいわが身をそのまま、投げ込み、委ねるところ、淋しいわが身をそのまま抱きかかえてくれる自分の支えを八木重吉は知っていた。そこでのみ彼は安心できた。

てんにいます おんちちうえをよびて おんちちうえさま
おんちちうえさまとなえまつる

いずるいきによび 入りきたるいきによびたてまつる
われはみなをよぶばかりのものにてあり

もったいなし おんちちうえと となつるばかりに
ちからなく わざなきもの たんたんとして いちじょう
のみちをみる

わたしたちが、自分の外側を知識や権力や金力でどれほど飾りたてても、自分の安心にはならない。本当の安心は、自分を支えてくれているものに気づくことである。自分を慰め、励まし、生き生きとさせ、他の人々にやさしく関わり愛をほどこせる心の余裕をもてるようになるため

には、自分を守り導いてくれるものを、しっかりと自分の内につかむことである。

自分の内に深い安心を持つために、わたしたちは何をすればよいのだろうか、と考える。はつきり言って、何もする必要はない。大切なことは「すばらしい自分にめざめる」ことである。

自分がどれほど素晴らしい存在であるかということに、あなたは気付いていない。

「あなたは、かぎりなく神に愛されている者です」というのが聖書の教えであり、イエスさまが生涯をかけて示されたことがらである。

私たちに何かを為せ、と言うのではない。正しくあれ、善であれ、というのではない。みんな正しく善で在りたいと思っているが、思いのとおりにならないのが自分であり、わが身である。みんなが仲よく、みんなが幸福でありたいと思うが、そのとおりにならないのが私たちの人生である。いくら努力しても淋しさが無くならず、不安がとれず、イライラしてしまうのが自分である。自分の努力で何かをしたり、他人の力になにかをしてもらうだけでは、本当の安心は自分に得られない。

「あなたが神を愛したのではなく、神があなたを愛しておられる」と聖書は教えている。わたしの願いの中に自分が努力して生きているのではなく、神さまの願いの中にわたしが生かされている。神さまの願いごころの腕に抱き抱えられているのが、わたしという存在なのである。そのような自分であるということに気付くこと、めざめることによつてのみ、私は本当に安心できる。

神さまのやさしい願いごころに抱きかかえられて生きている、そんな素晴らしい自分が、まさに、今の自分自身なのである。

くさがかれたんだから わたしのおもいだって すなおに
かれたらいい

これは「冬のある日」と題する重吉の詩である。

たしかに、私たちの心の内には自我という雑草が生い茂って、素晴らしい自分を見えなくしている。しかし、冬にくさが枯れるごとくに、私たちの内なる自我の雑草も枯れるなら、素晴らしい自分が自然に見えて来るにちがいない。すなおになろう、すなおになろう。

もう何年も以前のことである。部屋で無心に読書をしていたそのときわたしは、ストンと座ったまま下に落ちたような気がした。それと同時に言葉にならない喜びが身体の内から込み上げてきて、素直さの世界が目の前に広がった。そこは、神さまのやさしい願いごころの世界だったのである。愛と光り、恵みと命の世界だったのである。そして、そこが自分を支えている世界であることを知った。

わたしたちの心や思いは自己中心的な我欲で満ち満ちている。しかしそのような私に先立って、神さまの愛の手がやさしく私に及んでいるのだ。神さまの願いごころが先ずあり、それゆえに、わたしが在るのだ。この順序は絶対に逆ではない。神さまに愛されて在るのが私であり、私が神をあいて在るのではない。たとえ、私がどのような者であっても、神の愛はわたしにふり注がれている。これが、私たちが生きているというものの、根本的な構造なのである。このような、私たちの存在の構造を、イエスキリストは、理屈ではなく人を愛するという行いによって具体的に示してくださった。

いまひとつ、私の小さな体験を語ることをお許しねがいたい。

ある日、少し疲れ仰向けに軽く寝ていた。そのときである、突如、天井いっぱい文字が現れた、「恐れることはない」という文字である。それは瞬時のようであり少しの間のようにもあつた。瞬間的には、それがどのような事なのか理解できなかったが、しばらくして、自分自身の全てについて「恐れることはない」ということなのであると悟った。

神さま、神さまと口にしつつ、平安、平安と言葉しつつもなお、自分の内に不安と恐れと疑いとを神に對し、キリストさまに對して抱き続けていたその私に、「恐れることはない」と示されたのだと気付いた。

それは、私が何処に立って生きているものなのかということに對する回答でもある。また、本当にわたしを支えてくれているものが何なのかと言ふことについての示しでもあつたのだ。

人はいったいなんの為に生きているのだろうか。それについて多くの人はいろいろと語るだろう。だが、次の一つは決して間違ではないと思う。即ち、自分が如何に素晴らしい支えのもとに在る者であるか、ということにめぐめるために、生きているのである。

このような自分の存在の根本の事実気付いた者は、「なんと、わたしは素晴らしい者なのだろうか」と、生きることに歡喜し、神さまをほめ讃えることであろう。そのときから、その者の人生は変わる。



べしるちるみ

わたしの言葉にとどまるならば、あなたがたは本当にわたしの弟子である

—イエスさまの言葉—

大切なものは目に見えない

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。 —聖書—

目で見ることができ、耳で聞くことができ、かつ、手で触れ、自分の頭で考えられることしか認めない人がいる。

世の中には、さまざまな人がいるわけだから、そのような人達がいてもなんの不思議もない。しかし、そのような人の心はどうなのだろうか。そのように割り切って本当に落ち着いていられるのだろうか、と思う。

目に見えるものだけが確かで、目に見えないものは雲をつかむようなもの、つまらないものだと考えているなら、それは少し思慮深^{しじゆふか}さに欠けていると思う。というのは、私たち人間は、目に見えるものだけと関わっているだけでは満足できない者だからである。

犬や猫なら、腹一杯食べればそれで満足できるかもしれない。しかし私たち人間は、腹が満たされても心が満たされなければ、本当に満足と安心とは得られない。心の内に心配や、怒り悲しみがあると、腹一杯にものを食べても、決して満足と安心とは持てない。人間にとって安心は心が持つものではなくて、腹が持つものではないからである。

それにしても、心というものは不思議なものである。見る

ことも触れることも出来ない。まったく「手ごたえ」のないものである。にもかかわらず、私たちにとても大きな影響力をもっている。見えないからといって絶対に馬鹿にできないのが心である。

例えば、家庭とは何によって支えられているのだろうか。

お父さんとお母さんと、その子供達が居るから家庭なのだろうか。そうではない、外から見ただけの形が整っていても「つぶれている家庭」もある。「あの家庭はもう完全に崩壊している」と言われるとき、家庭の何を指してそのように言うのだろうか。父がいない、母がいない、子供がいないということではない。そうではなくて、そこにいる夫婦や親子の間に愛と信頼とがなくなつたとき、その家庭はつぶれてしまふのである。家族を結び付け、家庭を支えているのは愛と信頼なのである。それが無くなれば家族も家庭も崩壊してしまふ。

愛とか信頼とかいうものは、目で見えることも手で触れることも出来ないものである。そのようなものが、家庭を支えているということは不思議なことである。

見えないけれども在るもの、手で触れることが出来ないけれども確かに在るもの、それが心とか愛とか信頼とかいったものである。希望とか勇氣とかいうものも目にはみえないが私たちの人生にとても大きな影響力をもっている。希望のない人生は暗く、勇氣が出てこない生き方は弱々しい。

目に見えるものは信じる必要はない。しかし、目に見えない

いものは信じるしかほかに道はない。だから、愛は信じるものであって頭で理解するものではないのだ。信頼とは自分の真実の心でもって相手の真実を信じることである。信頼とは頭脳で損得を計算した事実にもとづいてなされる行為ではない。希望においても同じことがいえる。イエスさまは「信じるものは幸いである」と申されたが、その言葉の意味は深く、本当にそのとおりで、と思う。

よくよく自分の生活を見つめてみると、目に見えないもの、信じるよりほかないものが、自分の生活を支えていることに気付く。

私たちの人生が、自分の思うように進んでいかないものであることは誰でも知っている。自分の思い、人間の思いをはるかに超えた大きな力があることを、自分の人生を少しでも自覚して生きる者は、理屈なしにそれを知る。

まさに、私たちの人生は、見えるものではなく、見えないものによって包まれ支えられ導かれているのである。これが、私たちが生きている世界の本当の構造なのである。だから、誰もこの構造を無視して生きて行くことはできない。

見える世界は知恵によって究められる。しかし、見えない世界は信じることによって確認されるのである。このようにして、私たちが生きて行くうえで大切なことは知恵だけでなく、信じるという心も必要でありその二つが私たちの内によく働いてこそ、安定した人間であることができる。その二つを自分の内に兼ね備えて生きることを信仰に生きるというのである。

ある時、老婦人が私に次のようにうったえてこられた。「先生、私達夫婦は病氣ひとつせず、子供たちを無事に育て上げ、元気にすごしてま

いりましたが、昨年、主人が思いもかけず大病をいたしました、私は心配と不安で、一生懸命に看病いたしました。そのためにわたしの心身はくたくたに疲れましたが、御蔭で、主人はもとどおりとはいかないまでもとにかく元気になってくれました。その時、私の知っている人が、神様にお祈りすることを勧められました。主人共々教会に連れて行って下さったのです。そして、その方は、熱心に私たちのために祈りをして下さったのですが、悲しいかな、私たちは祈れないのです。今まで目に見えないもの、神仏にこころを向けたこともありませんが、手を合わせたこともありません。ですから、どうしても祈れないのです。その方を見ていて、幸いなお方だなあ、私もこの人のようになりたいたいと思うのですが先生、どうすれば、その人のようにになれるのでしょうか、教えて下さい」

このような方が他にも大勢いらっしゃるのを知っている。そして、その方達に共通していることは、それまでに目に見えないものに自分の思いを向けたり、神仏に心から手を合わせたことが一度もなく、目に見えないことだけに自分の関心を向けることに専念してこられ、すべてを自分の知恵でもって関わって来られた方が多い。

だから、年令がすすみ、自分の力ではどうすることも出来ない人生の出来事に出会っても、ただ狼狽するのみでどのように自分を処して行っているのか分からなくなる。まことに、おきのどくと言うしか他ない。

「どうすればよいのか」と狼狽する老婦人に「先ず、感謝のこころを生活のなかでもつことです」と申しあげた。手を合わせ神仏に祈る言葉も心も態度も自分にもてない人は、先ず、自分の生活の中で起こる一つ一つの事柄が、「当たり前的事」と思わないで、「有り難い事」「不思議

なこと」だということに気づくことである。そのとき、文句なしに感謝の思いがもてるようになる。

「有り難いこと」とは、いつも言うように、自分の生活の中でおこるひとつひとつの出来事が、そのように有ることが、決して当たり前の事ではなく、有ることが難しいこと、つまり、有りえないことが有りえている。「有り難いこと」なのだ、ということである。例えば、三度の食事が出来るということは、当たり前のことではない。食べ物があるということがどれほど有り難いことか、よくよく考えてみるとよい。又、食べ物を食べることが出来るということが、どれほど素晴らしいことか、自分の手で自分の口にそれを運び、咀嚼でき、腹の中で消化され、栄養が身につき、いらぬ物が排泄される。このことがどれほど有り難いことか、自分の身が病気になるればそのことを誰もがハッキリと理屈ぬきで「わが身で思い知る」のである。

また、それがどれほど不思議なことであるかということにも目覚めなくてはならない。不思議とは、不可思議ということである。思議とは思い考へてはかり言葉することである。つまり人の知恵で考へ言葉することを思議すると言のだが、それが不可、つまり出来ないことを「不可思議」「不思議」というのである。

私は、言葉遊びをしているのではない。今、自分が生きて有るといふことが、どれほど有り難く、不思議なことなのかということに、感謝しても、感謝してもつきない事なのだということを言っているのだ。

私たちは自分の力や知恵で生きているのではない。目に見えないものによって生かされている者なのである。

× × ×
生かされているのに、なぜそれが分からないのか。生かされているのに、なぜ感謝できないのか。生かされているのに、なぜ自分で生きてい

るように思うのか。なぜ、これほど単純な事実が見えないのか。

自分の感覚や知恵だけの働きで見たり知ったりする世界が私たちの世界ではないのだ。感覚や知恵では見ることも知ることも出来ない世界がある。それが見える世界を支えているのだ。そのことを内なる自分によく知っており、外なる自分の感覚と知恵に訴えて来るのである。

私たちは、見えないものに育まれている。ついになら言おうと「恵まれている」とは、「芽が育まれている」ということなのであるが、とにかく、目に見えないものに無条件に育まれてこそ、目に見えるものがあることが出来るのである。見えるものは見えないものから出てきていることを忘れてはならない。

先ず、目に見えない恵みがある。それは、すべての人、物におよんでいる。言うならば、私たちが在る以前に私たちは、目に見えない「恵み」に包まれていたのである。

私の感覚が働く以前に、私の知恵が働く以前に、私の肉体が働く以前に、目に見えない恵みが私を無条件に包み支え育んでいたのである。だから、それは「ありがたいこと」「さいわいなること」という以外に言いがたい。

だから、イエスさまは、

幸いなるかな、心の貧しい人たちは、

天の国はその人たちのものである。

幸いなるかな、心の清い人々は、

その人たちは神を見る。

と申されたのである。

—マタイ福音書五章—

× × ×

目に見えない世界に支えられているのが目に見える世界である、それは、目に見えない親の愛に支えられているのが子供である、というのと同じである。「親のこころ子は知らず」と言われるが、子どもは目に見える親の部分ばかりを見て、いろいろと批判もし文句も言う。しかし、自分が親となったとき、目に見えなかった親の心が見えてくる。だが、「親孝行したい時には親はなし」で、親に対して悔いを残す。

すぐに忘れてしまうような感覚を経験することがある。また、いつまでも忘れることが出来ない深い感動を体験することもある。「深い感動」とは、目に見えない心の深みが目覚めて動くことである。自分の心の根っこ部分が活性化することである。だから「深い感動」は、その人の生き方、考え方を変えてしまうのだ。「宗教」の「宗」とは「むね」とも読むが、「むね」とは「心根」であり、それは「心の根っこ」のことである。したがって、「宗教」とは正に、人間存在の根っここのところに開く教えといえる。

どのような人も心の根っこを持っている。そしてそれは、その人の内から訴えかけてくる。「目に見えるものだけに関心を持たずに、目に見えない恵みに感謝する人になってくれ」と。

人々はいも愛変わらず、目に見えるものだけに関心をよせ、目に見えないものを軽んじている。だから、本当の生きる拠り所を大人も子供も持つことなく、ますます目に見えるものに寄り頼もうとする。だが、本当の救いはそこにはない。彼らは必ず行き詰まり挫折する。それが今や私達の目の前に迫って来ている。しかし、人はそれに気付いていない。

また、人々は本当に畏敬されるべきものを知らない。だから、自分の外側のみを飾ることに気を使い内側は貪欲と放縱と汚れとで満ちている。

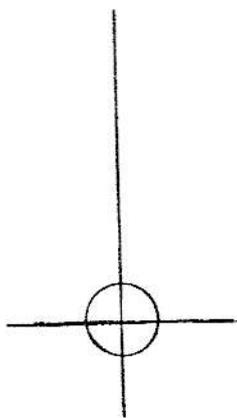
しかし、見えないものはそのすべてを知り尽くしている。彼らはそれを少しも知ることなく「すべてはうまくいった」と思い込んでいる。だが、見えないものに裁かれる。その時は間もなく来る。

しかし、目に見えない恵みに生かされている自分を知り、それに畏敬と感謝とを持って寄り頼むことができる人は「幸いなるかな」を生きる人である。そのような人は死んでも見えない命は栄光に輝き、神に在って永遠に生き続ける。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠である。

さて、初めの聖書の言葉に戻ろう。「望んでいる事柄」も「見えない事実」も同じことを示している。それは、見えるものの根っこに在ってそれを支え育んでいる恵むもの、即ち、「さいわいなるかな」としか言いようのない神さまの働きそのものである。

その働きを目でみるように見て信じ、手にとるように認めることが出来る心眼をもつことが出来るものはさいわいである。

神さまは、今、イエズさまを通し聖書において、見えない恵み、「さいわいなるかな」を、私たちの内なる自分に示してくださっている。



あしがき

私たちは自分に対するさまざまなことがらに熱心に目を向けて生きていますが、当の自分自身については、自明のこととして問うことはありません。しかし、私たちは、自分自身については何も知っていないのです。当の自分とは何なのか。自分を生かしている根源的な命は何なのか。自分が今ここに生きている意味は……。このように自分自身の存在について、あらためて問うとき、自明のことのように思っていた「自分」について、自分はなにも知らないままで生きていることに気づきます。それは、自分を見失ったままで生きているということであって、私たちが自分の存在について持っている根源的な不安は、このような自分の存在状況から生まれて来るのだ言えましょう。その意味でこの冊子にある一つ一つの文章は、いわば、私の「自分探し」の作業であり、できれば、他の方とも、その作業をご一緒できればと願って「みちしるべ」誌に記したものです。

このたび、の教友の山本哲也氏が一冊に纏め、「みちしるべ文庫」に加えて下さいました。感謝いたします。

一九九四年四月二四日

みちしるべ文庫 九

「大切なものは目に見えない」

一九九九年六月二十日 第二刷発行

著者 松 下 昌 義

発行所 左京キリスト教会出版部

京都市左京区下鴨南茶ノ木町二九
電話（〇七五）七八一―九六四〇